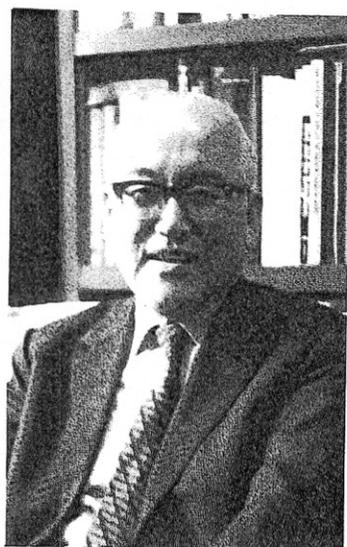


国民と森林

1986年・夏季
第 17 号



国民森林会議



人口の1割が自然保護協会員

——先生はこの間イスラエルへお出になったようですが。

沼田 ええ、自然保護の国際セミナーがあつて参りました。米・英・西ドイツ・ポーランド・オーストラリア・オーストリア・ノルウェー・南ア・オランダ・コスタリカ・ケニアなど多くの国が参加しましたが、世界的にも「なぜ自然保護をしなければならぬか」の根拠を明らかにすることが必要となつていきます。

イスラエルには、八年前にも行きまして、環境教育がすすんでいると感銘を受け、今回のセミナーにも出席したわけです。

——イスラエルの自然保護教育といえますと。沼田 国全体としてよくやっています。例えば、自然保護協会の野外研究センターが全国二十六ヵ所にあります。ここでは研究者用の宿泊施設では個室が準備され、生徒も二、

生涯通じた自然教育を

沼田真自然保護協会理事長に聞く

三百人は泊れます。大学には野外学校があつて、センターとともに中高大学とそれぞれ自然教育の研修があります。学校だけでなく、青年会や成人学級の自然教育もあり、全国に約三百人の指導者がいます。

国民皆兵で男女とも二年の兵役があります。女性兵士は自然保護のリーダーを勤めることで兵役の替りになるとのこと、私たちが案内してくれた女性兵士も銃は持っていませんが、その地方の自然のことには大変くわしいようでした。

ワシが営巣していてその飛行コースになっている所は、軍用機の飛行も禁止されています。(軍用機の機首がワシの方を向いたボスターを示して)ここに「注意!われわれは空を共有しましょう」と書いてあるでしょう。こんなボスターが張り出されています。臨戦体制の国でここまで徹底しているのですから。

鳥や哺乳動物の狩猟は一切禁止されています。「この地区にはヒョウが二十頭いる」というのです。麻酔銃で撃って発信器をつけて管理している。もちろん増えすぎれば、係官

「ぬまた・まこと氏 一九一七年茨城県土浦市に生まれる。四二年東京文理科大学生物学科卒。千葉大学教授・東北大学教授(農学研究併在)。六九年から二回通算九年千葉大学理学部長。八三年退官、淑徳大学社会福祉学部教授。理学博士。環境庁自然環境保全審議会委員・自然保護協会理事長・日本ユネスコ国内委員会委員・緑の地球防衛基金副会長・国民森林会議会員。

が個体数調節をするのですが、こんな状況ですから人間の方が住居や畑を囲む高いフェンスの中に入っている。四百二十万人の人口のうち四十五万人が自然保護協会会員といえますし、自然教育ツアーも盛んです。

——そこで日本の場合ですが。

沼田 自然保護憲章(七四年制定)にうたわれていますが、なかなか浸透していません。日本の環境問題は公害から出発し、自然保護に目を向けることが弱かった。自然保護協会ができて間もない三十年前に、「自然保護教育についての要望書」を政府に送っています。が、今読んでも適切なことが書いてあるのになかなか実現しない。文部省も、既存の教科

目次

季刊 国民と森林

No. 17 1986年夏季号



〈巻頭インタビュー〉	
生涯通じた自然教育を	沼田真…………… 2
〈写真〉	
緑の5月 森林の5月……………	4
〈焦点特集〉	
緑の団体協議会を結成……………	6
記講 1 開発と社会の変化	中根千枝… 8
念演 2 国土計画と緑	下川辺淳… 9
設立趣意書/規約……………	7
バイテクの明日	木方洋二……………10
ブラジルの森林	野村隆哉……………12
〈座談会〉	
山村に働く……………	16
若者の意識を龍山村にみる	
〈随想〉	
いのちたちの樹々	石牟礼道子…22
シンポジウム “つまみぐい”……………	24
高橋裕/堤利夫/福岡克也/榛村純一/大内力/半田良一/中川藤一/真砂典明/筒井迪夫	
〈会員のべえじ〉	
会員の所感……………	29
工藤俊夫/山田嗣/今関六也	
会員の消息……………	32
八千草薫/青山宏/大内力	
会員の出した本……………	33
再考日本の森林文化/巨樹/自然と労働/いま食い改めるとき	
「国民と森林」アンケート……………	29
切り抜き森林・林政ジャーナル……………	34
第4回国国民森林会議総会……………	36

(氏名敬称略)

表紙 谿若葉 東山魁夷 1976年
 第8回五山会展出品 50.6×60.5cm
 暗い杉の谷を背景に若葉が明るく浮ぶ山の斜面。すぐ近くにうぐいすが澄んば声で歌っている。

目次題字 隅谷三喜男
 カット 森前しげお

と同じに考えて「そんな新教科の余裕はない」といつていましたが、自然保護教育、環境教育は、すべての教科に関係したものです。理科だけでなく、国語、家庭、音楽、社会などあらゆる教科の中にその視点が必要なのです。学校教育だけでなく、社会教育、生涯教育の問題でもあるのですね。

日本でも学習指導要領に「人間と自然」などとして入っていますが、うまく実行されていない。米国では七〇年に環境教育法をつくって取り組んでいます。昨日も滋賀県の教育センターに頼まれて自然教育の話をしてきましたが、県によっては熱心に取り組んでいます。滋賀県ではリーダーの先生方が「環境教育Q&A」という手引き書まで発行していました。

森林の見方をトータルに

——日本の場合、林業と自然保護が対立するようになっている側面もありますが——

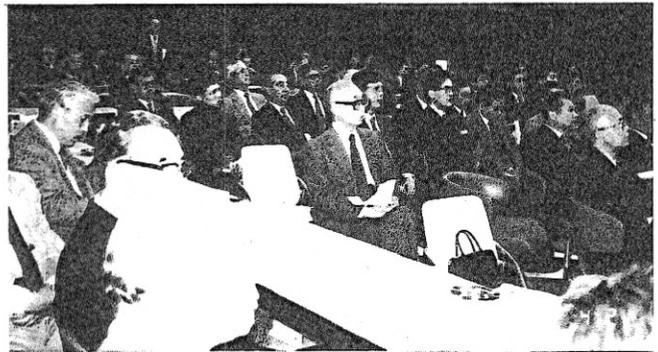
沼田 大分以前にハワイでシンポジウムがあった時、「保続生産林業」ということがいわれました。この生産は木材だけを指すのではなく、野生鳥獣・保水・レクなどをふくめ、その収量を最大に保つという考えです。いま金にならぬそうしたものをどう補償するかは政策の問題です。

民有林もふくめ木材だけの林業を考えていては時代遅れになります。千葉市ではたくさん保存樹林を指定して森林所有者の協力を求めてきましたが、「相続税のために伐らせてほしい」というケースがしばしばあります。

ですから、森林をトータルに考えると同時に、トータルな政策も考えねばなりません。ラワン材も「持ってくる」だけではなく、チーク材のように現地で造林できるように日本の技術でやらねばなりません。他国から無制限に持ってくればいざれ制約を受けます。それだけ国内で自給することが必要でしょうが、これ以上人工林化してほしくない。

役所は「人工林率」を上げることが政策目標にしていますが、その根拠は不明確です。人工林、二次林のいずれの形でいくか、地形、地質・土壌、水条件利用の立場などから地域区分し、目標を定めてやるべきでしょう。生態的な特性に応じた地域区分にもとづく林業がこれから重要になってきますし、それを可能にする政策的なバックアップがほしいですね。

緑の五月、 森林の五月



緑の団体協議会設立総会



緑の団体協議会設立総会



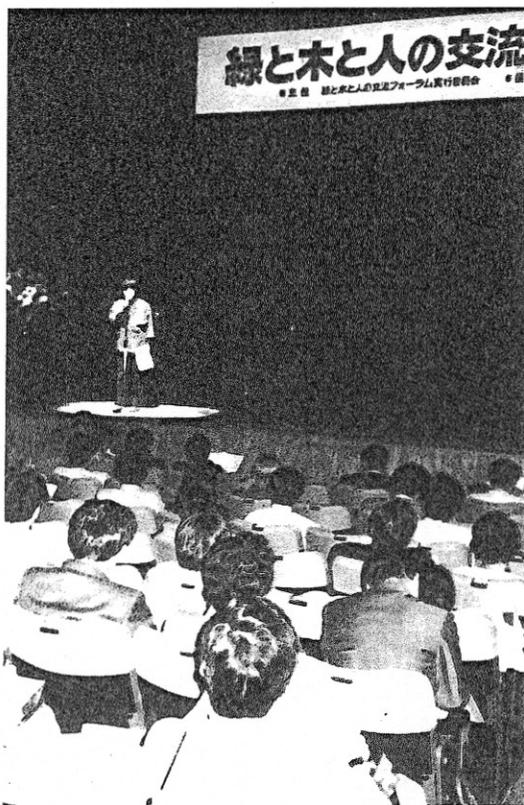
緑の団体協議会

(上) 隅谷会長も発起人の一人としてあいさつ。(右) 上から、記念講演を聞く聴衆
 発会記念パーティもなごやかに、マスコミも注目してテレビ取材

四月二十一日、関係者が待ち望んでいた「緑の団体協議会」が発足しました。「森林・林業」について関心をもち運動している各団体の連携を密にして、運動をさらに盛り上げよう——というものです。そうした動きを裏付けるように、四・五月は全国でシンポジウムや森や木と親しむ行事が繰り広げられました。

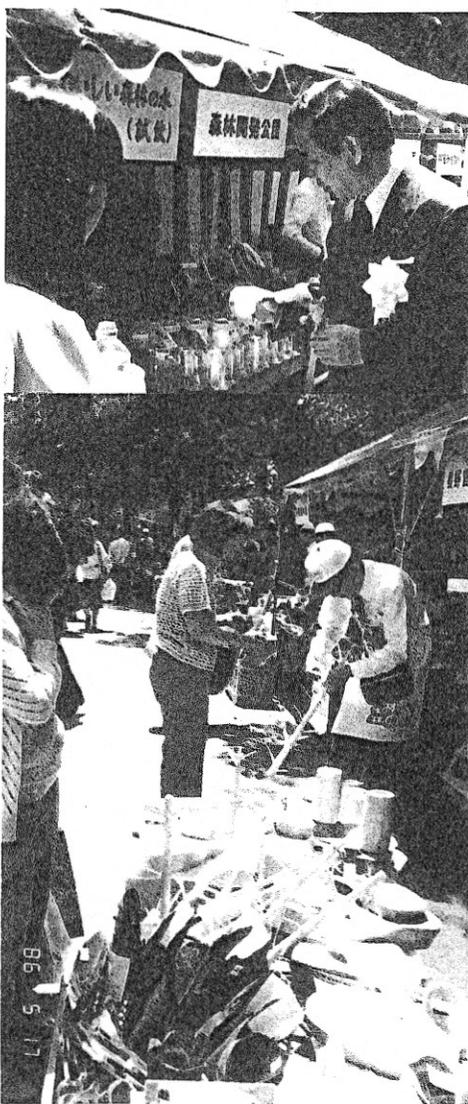
緑と木と人の交流

主催 緑と木と人の交流フォーラム実行委員会



4月30日東京・新宿紀伊国屋ホールでは「緑と木と人の交流フォーラム」

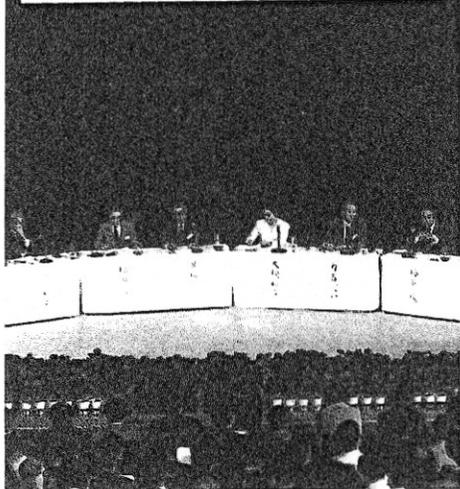
5月17・18日は東京・代々木公園での「第3回森林の市」(林野庁主催)には羽田農林大臣も(上右)



シンポジウム「緑と水と街」

Symposium Greenery and Water and Town

主催 朝日新聞社・社会文化協会・朝日インテグニエス社・経済の地球財団基金



4月24・25大阪市では朝日新聞の主催する「緑と水と街のシンポジウム」が
朝日新聞提供

総評・社会党は13日東京で「みどり・木と山林・都市をつなぐフォーラム」(下右) 18日東京・高尾山で「山に親しむ会」(下左)をもった。



みどり・木と山林・都市をつなぐフォーラム



森林・林業の再生に連携強める

緑の団体協議会を結成

森林・林業の再生をめざす諸団体が手を取りあって運動を進展させよう——という「緑の団体協議会」が四月二十一日発足しました。隅谷三喜男国民森林会議会長ら六人の呼びかけによるもので、当日は、自然保護団体や「緑のボランティア」、林業関係団体など五十近い代表が参加して、緑と林業の再建にむけて協力し合うことを誓いました。

森巖夫世話人（森とむらの会理事）の司会で開会。開会のあいさつに立った本間義人世話人（毎日新聞編集委員）が「最近の緑への関心を一時的なものにしないで二十一世紀に向けて運動を続けていこうと、六団体の代表が呼びかけて本日を迎えた。今後国会の超党派の活性化議員連盟や労働四団体に呼びかけて幅広い運動をめざす会にしたい」とのべました。

つづいて来賓のあいさつに移り、田中恒寿林野庁長官は「森林・林業は危機を迎えているが、国民参加のもとでテコ入れしたいと考えている。そうした時にこうした協議会ができ、自由かつ達な意見が出されることはありがたい」とのべ、加藤陸美環境庁自然保護局長は「この会は役所が考えていることと一味違ったものを考え、提案していただけると期待している」と協議会への期待と励ましをのべました。

ついで江藤素彦世話人（日本緑化センター専

務理事）が発起人と世話人を紹介、発起人を代表して「国民の一人ひとり緑が大切と認識して毎日の言動に表すことが大切。国土の状況をみても下流にばかり投資をし、上流には手をかけていない。力を合せてもう一步運動をすすめるために会をつくった」（水上達三緑化センター会長）、「自然保護が叫ばれる片方で林業や山村が崩壊している。そのための運動はそれぞれの団体の運動だけでは限界もある。団体のワクを越えてお互い努力したい」（隅谷三喜男国民森林会議会長）、「森林・緑の危機を憂えて多くの団体が立ち上がった。が、その団体が集まって胸襟を開いて話し合ったことはない。立場は変って当然。それが大切なのだ。共通点を見出して初めて国民の支持が得られる。林業団体だけのがんばりでは限界だ。自然と林業とのふれ合う林政をめざし努力しよう」（片山正英日本林業協会会長）と決意をのべました。

ついで神足勝浩世話人（緑の地球防衛基金理事）が「経過」の報告、杉本一世世話人（森林文化協会常務理事）が規約、活動予定、予算を提案し、それぞれ承認。協議会代表に発起人が就任することを確認して発会総会を終えました。



緑の団体協議会設立総会

「緑の団体協議会」設立趣意書

緑への国民的関心が高まっているにもかかわらず、森林をめぐる環境は悪化するばかりです。

日本列島は、急峻な脊梁山脈がつらぬき、台風や梅雨時の豪雨で、洪水、地すべりが頻発するなど、自然災害に脆弱な構造になっています。こうしたなかで、国土の七割を占める森林は、土壌を保全し、水資源をかん養し、さらに大気を浄化し、生態系を維持するなど、国土の基盤を支える重要な役割を担っています。

また、森林は木材を生産する経済活動の場であるのに加え、保健休養、野外活動や青少年の教育の場としての社会的、教育的機能をもち、国民の大切な文化的資産でもあります。二十一世紀へ向けて、森林のもつ多様な機能がますます重要性をまし、国民の森林への期待が一層強まることは明らかです。ところが、森林の担い手である山村は、深刻な人口の過疎化、高齢化に悩み、林業の長期不況にもなつて、人工林の管理はなおざりにされ、その質は急速に低下しています。このままでは、森林の荒廃は広がるばかりです。

森林の荒廃は、水源の枯渇を招き、都市の危機につながるの明らかです。その都市自体も、開発によって貴重な緑の空間を失い、居住環境が悪化しつつあります。

海外に目を転じれば、地球規模で森林の破壊と砂漠化が進み、開発途上国では熱帯林の喪失が人間の生存基盤をおびやかすまでに

りました。欧米諸国では、酸性雨による森林の被害が深刻な問題になっています。

このような状況を前に、わたしたちは緑が人間にとってかけがえのない存在であることを深く認識し、森林のもつさまざまな貴重な機能が十分に発揮されるよう、いまこそ森林と人間のかかわりを真剣に考えるべき時だと考えます。

わが国の森林をこれまで守り育ててきたのは、山村地域の住民ですが、これからの森林は、国民の多様な要求に応えるために、都市住民を含めた国民すべての責任において、国民総参加の森づくりを目指さなくてはなりません。

緑への国民的関心の高まりは、国民全体の課題として森林を考えるうえで、大きな力となりうるものであります。わたしたちは、森林をめぐる現在のきびしい環境を克服して、山村、林業を振興し、森林の復権、都市の緑の復活に向けて、緑ゆたかな日本を二十一世紀に引き継ぐため、ここに幅広く緑関係の団体を結集し、力を合わせて強力な運動を展開できるように、「緑の団体協議会」を結成しようとするものであります。

一九八六年三月末日

発起人(五十音順)

大石 武一(緑の地球防衛基金会長)

片山 正英(日本林業協会会長)

茅 誠司(緑の文明学会会長)

隅谷三喜男(国民森林会議会長)

高木 文雄(森とむらの会会長)

水上 達三(日本緑化センター会長)

「緑の団体協議会」規約

〈目的〉 この会は、緑関係の団体間の情報交流、連絡調整、運動の連携等をはかり、人類生存の基盤である緑を守り育て、森林および林業、山村を再建し、自然環境を保全し、緑ゆたかな国土を後代に引き継ぐために寄与することを目的とする。

〈活動〉 上記の目的を達成するため、次の活動をおこなう。

- 一、機関誌を発行し、参加団体の情報交流、連絡調整、運動の連携等に資する。
- 二、懇談会、山村と都市との交流、対話等、本会の目的に即して参加団体がおこなう事業を支援、協力する。
- 三、その他、この会の目的を達成するために必要な事業等をおこなう。

〈会員〉 会員は、この会に賛同する法人・団体および個人とし、代表会が認めるものとする。

〈会の運営〉

- 一、総会を年一回開催し、出席会員の三分の二をもって議事を決する。
- 二、この会に代表会および幹事会をおき、代表会は総会で選ばれた代表で構成し、会の運営に当り、幹事会は代表会が任命する幹事で構成し、会務の執行に当たる。
- 三、任期はいずれも二年とし、再任をさまたげない。

〈会費等〉

- 一、この会の運営に必要な経費は、会費および寄附金等をもってあてる。
- 二、会費の額は総会で定める。
- 三、この会の会計年度は、一く十二月とする。

緑の危機がいわれています。特に東南アジアで熱帯雨林の消失が憂えられて、その原因の一つに焼畑耕作が挙げられている時、彼等の生活を通して考えてみたいと思います。

インドではかつては焼畑をする山岳地帯の農民と水田を耕作する平原の農民とは住み分けていて、両者の境界には伝染病の温床で猛獣が住む無人地帯があった。焼畑地帯は、二千メートル内外のゆるやかな山で気候もいいわけです。焼畑は、一年ごとに森を焼いて作物をつくり、二十年で元の場所に帰り、また生い茂った森を焼いて耕作をする生活でした。

しかし、英国の統治が始まり、衛生の発達・首狩戦争の中止などで人口が爆発的に増えて、一九



開発と社会の変化

—— 発展途上国問題をめぐって ——

五五年頃は元の二十年周期が十年にまで縮まっていた。それでも、一年に二年分の食糧が得られるほど豊かでした。こうした焼畑では、八年周期が限界で、それ以上短くなると地味が悪くなり、落ちてしまう。現在の焼畑から上の標高は地形が悪く焼畑にできません。そこで、住み分けの無人地帯の森林を開いてそこに住もうとしたり、山岳地帯を水田に変えようと政府はしますが、ほとんど労働のからぬ焼畑にくらべ労働がきつく、成功しない。一方、平原の水田では、爆発した人口は都市へ集中していきます。

ネパールも五〇年代と景色は一変しました。カトマンズ盆地はかつては段々畑は山の中腹まででしたが、今は山の頂上まで畑になっている。これも、かつてはシッキム、ブータン、アッサムの方に流れ出してネパールのような山岳地帯を開いて住みましたが、流出先も一ぱいになり、ネパールで山上まで耕して住まなければならぬようになったのです。

“近代化” にもなっていない人口増加にどう対応するかが問われているのがこうした国だろう。焼畑の場合、三〇五戸で動いて耕作してい

る方が村で固定しているより収入が多い。しかし、そんなにコミュニティが小さいと、余剰人口を吸収できないし、現地には対応を考える伝統もない。政府のトップにはそういう認識があっても、現場にはそういう受け止めがないのです。“緑の問題” の背景はこの人口増加に対し、どうすれば昔の焼畑の範囲で生きていくことができるかがあると思います。

先進諸国の援助にも問題があります。援助はまず、病人を救おう、食糧を——ということになります。病院の施設をつくることは方法とし

中根千枝 (東京大学教授)

えられなければならないと思います。

水利・農業の生産性向上と健康な人が病人にならぬ援助こそ先決でしょう。山岳地帯に木を植えても、そこに住んでいる人にどうするのか——を考えないと救うことはできないと思うのです。

(文責・編集部)

日本には古くからいろんな森林文化が生まれてきた。縄文・弥生両文化、三〜七世紀の朝鮮・中国の影響を受けての巨木文化、十世紀以降の木の生活の本格化、十七、八世紀になると山の荒廃を恐れ人工林という木の文化を作り出した。

明治の廃藩置県は、それまで生態系的な生活圏を崩し、工業化をすすめることになった。明治になって東京でも四谷に桜を植えたり、日比谷、上野、神宮の森など作ったが、都会全体を見ると、都市化、近代化の歴史は河口部の肥大化だった。二十世紀は都市の人口は十倍になり、わが国全体のGNPが世界の一〇%を占めるといふ猛烈なスピードで近代化した。世紀初めには第



国土計画と緑

一次産業は二五%を占めていたが、二十一世紀には七・五〜五%になるだろう。

二十世紀は、水系、森林は災害のみが問題になり、交通・通信が重視された。鉄道、自動車の時代は水系を切断して都市と都市を結ぶネットワークが中心になった。それに警告した意見は少数派だった。しかし、本協議会の発足は、新しい森林文化を考えようという意見が多数意見になろうとしていることを示している。

前世紀には極東の離島経済にすぎなかったわが国が、二十一世紀は、世界の六十億人が生き

を確保」が柱だ。四全総も国土計画も森林を基本にするものに変っている。

最後に私見でしめくりたい。①木材市況が悪化した。このことをチャンスとして日本に巨木を甦らせることはできないか。フローよりストック。今後千年の日本の歴史にとって大切なことで、巨木に話題も金も集まろう。②日本の山を管理するため、都会から若い人のグループを山に送ることが考えられないか。企業・公共団体・国・個人が手をつないでやるべきことではないか。④国民一人が年千円、十年で一兆円を

下河辺 淳（総合開発研究機構理事）

るためにどんな役割が果たせるか考えることが必要になる。その方向は重化学からサービス産業への転換だと思ふ。その中で森林をもう一度考えさせる余地を持っている。

いま策定中の第四次全国総合開発計画（四全総）でも「定住圏構想」は受けつがれていくと思うが、それは藩の時代の生態系の圏を考えていくことになろう。二十世紀に都市と農村が対立したが都市と農村の交流が大切。

昨年二回目の国土利用計画を作ったが、「森林を可能な限り拡大、最低現在の二千五百万畝

ためて森を守る基金をつくってはどうか。⑤その運動のために、自然系・経済系を融合した森林の科学にしなければならぬ。

二十世紀は農山村から人材を東京に集中して発展してきた。しかし、三千万という世界にない巨大都市が「人間の住むべき所でない」と気づいた時のとまどいを覚える。のめる水、生産できる土、森林があるところに文明が生まれる——という指摘もあるが——。

今日の延長線に未来の科学技術にあるのではなく、世界の潮流は「エコポリス」（小さな自然に囲まれた都市）である。二十一世紀に新しい森林文化を日本がつくる時代に来ているといえる。

（文責・編集部）



バイテクの明日

木方洋二名古屋大学教授に聞く

——バイテクということがいわれますが、どんなものをさしていますか。

木方 二つの基礎的な技術があります。一つは「遺伝子組換え」ですし、もう一つは「細胞融合」です。親のもついろいろな性質は子に伝えられますが、これは数万もの遺伝子が関係しています。そのいくつかを人工的に他の遺伝子と取換えようというのが前者、後者は二種類の生物の形質を備えたそれぞれの生物の細胞をドッキングしてつくろうという技術です。

その技術を生産に結びつけるものとして、細胞の大量培養、バイオリアクター（生化学反応装置）という組織培養の技術があります。

元もと植物は固体復元能力に優れていて一つの細胞から完全な植物になり易いのです。ですから、ある細胞の中にある遺伝情報を入れてやる等して、その情報の発現に成功すれば新しい植物にすることができ易いわけです。

——そのバイテクを林業の面で使うとすればどんなことになりますか。

木方 現在では微生物を使った物質生産が行われているわけですが、それを樹木でもというのです。一つはすぐれた形質の木をみつめる。これは自然界のものほかに、遺伝子組換えや細

胞融合によってつくられたものもふくみます。現在行われている交雑育種には限界がありますし、バイオテクノロジーによると変異の拡大が望めるわけです。

それらを組織培養によって苗をたくさん作って、早くふやそうとすることです。林木の育種で、精英樹から挿木・ツギ木して増すよりずっと早くふやすことができます。

二つ目は、キニーネやゴムのような樹木の特殊成分をバイテクで培養した植物細胞からつくることが考えられます。カネボウが「バイオ口红」というのを発売しましたが、あれはムラサキの根からとるとしたら五年もかかるものをタンク培養で一ヵ月でつくったそうで、樹木でもそれをやろうというわけです。しかし、これはキロ十万円以上もするものでないと引き合わぬという話を最近聞きました。しかも、大量に使うものでないといふのでしょうね。

三つ目は、樹木生理学の研究教科といった面での利用です。例えば栄養を与えたら、細胞の中でどう吸収されていくのか——という研究を組織培養した細胞の段階で栄養を与えてみる。リグニンがどうやって作られていくかを見ること等、樹木でやってはむづかしいことが細胞で

バイテク（バイオテクノロジー）という言葉がもてはやされているのに、その実態は余り明らかでない。バイテクで何ができるのか、どこまでその研究はすすんでいるのか、名古屋大学木方洋二教授（農業部・林産学）に聞いてみました。

見ると早くわかるのではないかとということです。——上はトマト、下に馬鈴薯という植物「ポマト」を人為的に作っていますが、あれもバイテクですか。

木方 そうです。しかし、お化けのような植物を作るのが目的ではなく、暑い所で馬鈴薯ができ、寒い所でもトマトが実をつけるような植物を作ろうとしているわけです。白菜と甘藍の合成した「白藍」が市場にでていますが、木材の場合そこまでいっていません。

木材の場合、王子製紙の育種場で二・三の木で細胞融合に成功したと聞いていますが——。キッコーマンではオレンジとカラタチをひつつけた「オレタチ」をつくりましたが、この分野の進歩は意外な早さですから、案外早く色々と実現するかも知れません。

パルプの場合は、木材でなくても繊維であればいいので、繊維植物のタンク培養ということになるかも知れません。セルロースを合成する細菌もでていますし——。

大量生産する技術では、林業試験場でシラカンの葉柄による大量増殖を実験し、一本の葉柄から七ヵ月で数万本の幼植物体の生産ができた——と報告しています。王子製紙でも、ポプ

ラで月に四倍、年に百万本にする技術を完成させたようですが、一般的にいつて針葉樹ではむつかしいようです。

——ランの増殖はもう企業化されていますね。外国はどうですか。

木方 進んでいますね。昨年三月にアメリカのウエアールハウザー社の研究担当の副社長が来日し、方々で講演して歩きましたが、その時「ウエアールハウザーでは針葉樹で成功した」と発表して各界にショックを与えました。

講演会での私のメモによりますと、

当 年 の 生 産 量	地区		目 標
	1	2	
1960	7	10	
1980	10	16	
1990	14	22	
2000	22	34	
	30	46	

です。

こうしたすぐれた生産力をもった品種のクローンを組織培養し、百粒単位で植えているそう、「林木生産では天候以外の要因はクリアした」といっています。七百五十人もの研究スタッフを抱えてワシントン大と提携して研究しているウエアールハウザー社らしい——と当時この話がちりちりでした。もっとも「細胞融合に成功しただけ」と見る日本の専門家もいますがどうでしょうか。

ウエアールハウザー社では、一九九五年にはこのエリートの木を一億本造林できる——といっていて、すでに二十四万粒のロブローパイン林をつくり三十年サイクルで回転しているこうしています。これは千本の生産のパルプ工場の資

材をまかなう森林に匹敵しますが、ここではチップに五〇%、製材に二五%、エネルギーに二五%あてるといっています。

その他新しい林産の技術開発も盛んです。新しい木質材料の開発。例えば、ウエアールボード・O・S・Bといったパーテクボードと合板の合いの子のようなものが開発され、サミットハウスにも使われています。

また、紙パルプ工場を完全にクローズシステムにして、工場の中ですべてが完了するようにも動いているようです。技術改良によって歩止りも上り、公害防止もしようという狙いです。

——それでは、資源の問題の解消ばかりか、木材をめぐる環境も一変しますね。

木方 その時のウエアールハウザーの人の説明では、天然林の成長量はスカンジナビア、カナダといった北の方ではヘクタール当たり、年〇・五—二㎡、サザンパインで四㎡、条件のいい太平洋岸で五㎡程度です。人工林でもサザンパイン十六㎡、太平洋のベイマツで十四㎡といったところ。それをバイテクで三十一—四十㎡にする、条件の悪いカナダ、スカンジナビアでも十㎡になるといいます。

しかし、早く大きくなればいいというものでもないと思います。日本でもスギやカラマツの間伐材といった若い木の用途がないのも、若い材の形質が優れないからで、人工林で生長のいいスギやヒノキも年輪の目のアラいといった理由で値がつかないようです。アメリカ流に言えば目の荒い弱い材でも二in×四in(ツーバ

イフォ)でなく太くして二×六の木材で使えばいい——というのがウエアールハウザー社のいい分です。

そこで日本ではいま長伐期にして、高品質材を供給しようとしています。果して百年後そんな材が通用するのかわかりません。大変なわかれみちです。ウエアールハウザーは「狭い国土の日本では森林は環境保全・レクノの場として利用し、生産は米国が担いましょう」というのですが、日本の木材を使わないとすると、林業はない、林業がなければ山村に住む人はいなくなる。すると山は荒廃しますから、日本の林業はきちんと続けるべきだということになるのですが……。

日本の色いろの地区の山の条件を科学的に分析し直す時期が来ているのではないのでしょうか。緯度、標高、傾斜、土壌、気象条件、山村の立地条件等々からある地区の山は木材生産に、ある地区は動植物の保全に、或はリクリエーションに等と、最適の山村形態までもあわせて考えることがもっと学問的にも、行政面からも論議されるべきでないでしょうか。全世界的な視野で、ものを見ることが木材、山村の生活にも要求されているのです。

そういうことを考えると、日本のバイテクの一つの方向として、目のつんだ木材、例えば一年に「年輪」を二つもつものをつくるのか、カラマツ、スギの辺材部分を狭くして心材化すること、病虫害に強い品種の合成などには有用かもしれませぬ。(文責・編集部)

ブラジルの森林

野村隆哉 (京都大学 木材研究所)

先進国の快適性追求が—

近年、地球レベルで森林破壊の問題がクローズアップされ、論議が喧しいが、森林破壊の本質に立ち入り、具体的かつ実践的に問題の解決に当たるといふ能動性に欠けたものが多いように思われる。

際限もない科学技術競争を軸にした先進諸国のアメニティー（快適性）の追求が開発途上国に波及し、森林破壊を加速している現実を無視して、問題をどのように解決しようというのであろうか。しかも今やこのアメニティーを輸出することが先進国の国益にもつながるとあれば問題は益々困難になっていくといえる。気の遠くなるような長年月をかけて地中に固定された石油エネルギーと、地上に樹木として固定されたエネルギーをアメニティーのため無制限に乱用したヨーロッパ近代文明とその乱用の頂点に立つアメリカ、日本には膨大な量の自由エネルギーが集積されている。人為的にこの自由エネルギーを元の森林にもどすというエネルギーの固定はこれらの国におけるアメニティーの追求を否定し、経済を低成長あるいはマイナス成長に落とし入れるという結果につながるため、今日

のような経済システムでは不可能に近い。

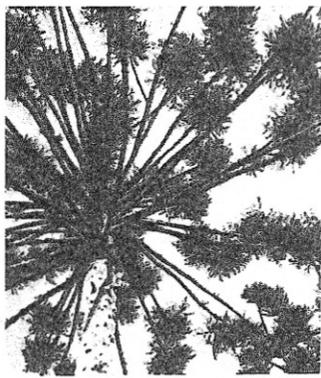
しかし、一方で緑の復権が叫ばれ、これに関連した事業や文化活動が活発になってきたが、これらの一連の動きは本質的には従来の経済システムの枠組の中で、経済効果を十分計算した上で行われているものが多い。その一つ事例として上げられるのがイベントやこれに類似した催物のたぐいである。これはフロートしている資金を右から左に動かすための名目であって、その行為の後には何も残らないのが通例である。このように今日の社会は自由エネルギーをいつでも使える状態にしておかなければ機能しなくなる社会であることを十分理解した上で二世紀以後の人類の子孫に森林を残すという困難な問題に取り組まねばならない。そのためには、今日の経済システムに積極的に参加し、このシステムの中で少しづつイニシアチブをとりながら地道ではあるが自由エネルギーの林地への固定化を進めて行かねばならない。

前置きでくどくど述べたことは、実はこの一年間ブラジルに滞在し、この国が先進国の仲間入りするためにふりかまわず、近代化を進めている中で、これに必要なエネルギー源の確保のため森林が急速に破壊されていく現状を目

のあたりに見、文明化＝森林破壊という古代文明から続けられてきた図式と、現代文明による破壊力の巨大さを感じたからである。

我国のように国土の約七割が急峻な山で、ブラジルの約二三分の一の広さしかないところでは森林破壊は我々の日常生活の中でまだ識別しうるが、ブラジルのように南部及び南東部の海岸部に人口が集中し、国土の半分以上が人口密度のきわめて希薄なところでは、これらの部分の森林破壊、自然破壊はほとんど人々の目につかないまま放置されてきたし、広大な面積のため数十年の単位では破壊の影響を直接感じられない場合がある。このため破壊を推進している当事者が現場にいないで、他人まかせで施策だけ行くとあれば、とどまるところを知らず森林破壊がつけられることになる。

今日、経済大国としての我国が行っている海外援助の額は外務省だけでも一九八五年で八〇〇億円に達している。ブラジルに対してもかなりの額の援助が行われているが、ただ単にフロートしている資金を前述したように右から左に移しただけではイベントと同じで何も残らないのではないだろうか。文明化を助けるための援助が結果として地球全体の森林資源を破壊す



さて、前置が少し長くなったが、ブラジルの森林とその周辺のことについて話を向けていこうと思う。昨年三月から丸一年間、ブラジル政府の招請を受けサン・パウ

ることにつながっているという図式は一日も早くとめるべきであろう。
例えばブラジルのカラジャスで近年発見された巨大な鉱物資源の開発に我国も開発援助という名目で協力しているが、ここに埋蔵されている優良な鉄鉱石から銑鉄を生産するためこの燃料に年間二五〇万トンの木炭を周辺の森林資源を利用して生産しようとしている。この量は、我国で木炭生産が一番活発だった昭和一五年前後の年間生産量に匹敵する。木炭の原料は植林によってまかなうという計画であるが、はたして可能かどうかおおいに疑問である。

日本の23倍の国土に

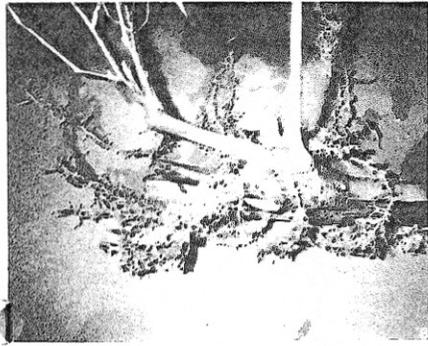
表一 ブラジルの植生とその割合 Percent

	Percent
Tropical rain forest	53
Parana pine forest	4
Palm forest	6
Littoral forest	1.5
Wooded savanna	15
Surub and brush	8
Prairie	9.5
Swamp	3

Mario Tomazello Filho Country report, 1979.

ロ大学の客員教授として「竹の栽培と利用」に関する研究指導を行った。この間、有用竹類の調査ではほぼブラジル全土を踏査した。北のローライマ州、西のアクレ州からアマゾナス、パラバイア、マト・グロソソ・ド・スール、パラナ、サン・パウロ、リオ・デ・ジャネイロ、ゴイアス、サンタ・カタリーナ、リオ・グランデ・ド・スールの各州である。
東西四三二八km、南北四三二〇kmでこの南北の距離はほぼ日本の下関からインドネシアのジャカルタ附近まで陸続きであることを意味する。東西に関してもほぼ同じで、この中に実に多様な植生が存在している。表一に代表的な植生タイプとその割合を示した。アマゾンを含む熱帯降雨林は全体の五三%を占め、日本のおよそ二倍、アラウカリヤ・ブラジリエンス（一般にはパラナ松と呼ばれる熱帯松）を中心とした森林が日本のおよそ九割、三三六〇万ヘクタールと呼ばれる草原台地が日本の約二・二倍、八一五〇万ヘクタールと呼ばれるヤシ類を主とした植生も日本の一・四倍もある。これらの植生の中に占める森林面積は総計すると日本の約二・二倍、五億六〇〇〇万ヘクタールがあるが、一九五八年から七三年の一五五間で五四〇〇万ヘクタールに直すと三六〇万ヘクタール、わずかに一五五間で日本の一・四倍の森林が消失したことになる。

前述したように森林の減少と工業化とは密接に結びついていることは、石油ショック前までブラジルの奇蹟といわれた高度経済成長期に森林は年平均三六〇万ヘクタール減少していたが、その後の経済の鈍化とともに、年一四六万ヘクタール減少のスピードが鈍ってきたのを見てもわかるであろう。その後、石油ショックから立ち直るためにブラジル政府がとった政策が、一〇年前から始まった国家アルコール計画（プロ・アルコール）である。
この計画に基づいてサトウキビ畑は増えつづけ、七五年に一九九万ヘクタールの作付け面積が八五年には三八三万ヘクタールになり、サン・パウロ州だけで一七七万ヘクタールに及んでいる。これはサン・パウロ州の森林の減少にも少なからず影響があり、現状では同州の森林率は七%を切るとうとしている。
国内で石油エネルギーの代替品を農産物から作り出すという発想は、外貨の流出を防ぎ、労働者を農業に吸収しようという点では成功したが、生産効率の面では石油に比べて比較にならないぐらゐ悪く、しかも、生産費の三分の一は政府の補助によって支えられているため、八六年には年間約三兆クロゼイロの赤字を生じるのであるといわれている。
一方、紙パルプの原料としての原木は八七年には一三〇〇万m³の不足が予想されており、生活燃料及び銑鉄用その他工業用燃料としての木炭もブラジルの統計はあまりあてにならないのでうのみにするわけにはいかないが、年間七五



写真—上 モウソウチク(左)
(ゲアリューロス、サン・パウロ州) 熱帯竹(右)カンピナス、サン・パウロ州)
写真—下 熱帯竹のサシ竹からの発芽、発根の状態(パンブーサ、ブルガリス)

○万tも生産されているという。これに前述のカラジャスの木炭鉄鉄用としての二五〇万tを加えれば一〇〇〇万tにもなる。

木炭の原木に対する歩止りを三〇%、木材の比重を〇・六とすると五五〇〇万tという途方もない木材を年間に使用しなければならぬ。しかも木炭用だけである。ブラジルの鉄鉱石の埋蔵量は六〇〇億tと予想されており、七八年には一億三〇〇万tの鉄鉱石が生産されている。この鉄鉱石は六六%の金属鉄量含有した良質なもの、もし、この産出量全てをブラジルで鉄鉄にすれば六七九万tになるが、これに必

要な木炭も同量となり、話が途方もなく大きくなってしまふ。一〇〇〇万tでも大変な量である。その六・八倍の木炭を森林に求めるとすればブラジルは丸はだかになってしまふ。

ここまで述べてきたことはいささかエキセントリックに、数量で森林破壊の現状を述べたにすぎない。それではこの現実を踏まえて、一体どのような解決法を具体的に示せるかが一番大切な点であろう。これから述べる解決法の一つはオールマイティーではないが少なくとも森林破壊の歯止めの一つとして有効なものと考えている。それは竹の利用である。

竹による資源づくり

竹に関しては一般にあまり知られていないし、まして、地球の反対側のブラジルに竹があるのかどうかも知らない人が多いであろう。そこで少し、竹について話をさせていたかどうかと思う。日本でよく見られる竹は大部分、一本一本が独立して生えてくる種類がほとんどであるが、熱帯地方の竹は写真で見るとように株になる竹が多い。日本の竹はサン木で増やすことは出来ないが、熱帯竹の中には竹稈を土中に挿したり、枝のついた節の部分を写真のように土中に埋めておくだけで活着するものがある。パンブーサ・ブルガリスやデンドロカラムス・ラティフローリスは一本のサシ竹から、生育のいいところで四年ほどで株の直径が三m、株を構成する竹も一〇〇本近く生える。一畝当たり二〇〇株の竹林を造成し、四年生の竹を一株から二〇本づつ

伐竹したとして、四〇〇〇本、一本の生重量を軽く見積って一五kgとすると六〇〇tの竹材が得られる。

竹類はその種類にもよるが、ヤセ地や比較的酸性の強い土壌でも良く育つものがある。ブラジル全土を踏査した結果、熱帯竹の生育は良好である地域が多く、特にセラード、プレーリー、パーム林等で農耕地としての土地利用が不向きな部分を含む地域でも十分栽培可能である。このような竹の性質、特性を利用して、林産資源を自然循環系に近いシステムの中で種々の用途に用いていこうというのが私の計画である。前述したように、一畝当たり二〇〇株とすれば一万畝で四〇〇〇万本、生重量で六〇万tもの竹材が得られることになる。おおよその目安として、この量からは竹炭にして一〇万t、パルプとしてもほぼ同量の収穫は期待できる。竹パルプ工場を作る場合、生産効率から考えて、工場周辺に三万畝の竹材があれば、ほぼ理想的な工場経営が出来ると思われる。ブラジルの地理的条件を考えれば、この程度の規模の造林はさほど困難ではない。そして皆伐ではなく、択伐による効率の良い集材システムを作り上げれば、毎年同一林分から同量の原材料の供給が可能であり、その分、天然林を伐採しなくてすむ。

鉄製製造用の木炭も竹炭に変えれば、今後、二五万畝から最大五〇万畝の竹の造林で二五〇万tの竹炭をまかなえることになる。精英樹のクローンによるユーカリの植林も大切であるが、伐期までに七年かかる上、同一林地から毎年原



木を供給するのは竹材のように出来ない。竹とマツ類及びユーカリ類を施業計画の中でうまく組み込んでいけば、天然林の減少はかなりのことである。しかし、冒頭でも述べたように、手っとり早い方法で、すぐにも利益を上げようとする輩が多く、利害関係だけで動くため、手近な森林が犠牲になる。ブラジルでは、現在のところ竹は全くといっていいくらい利用されていない。しかし、セ

ラード等の広大な未利用地の土壌改良に実に有効に使える。竹炭は活性炭としても優れており、家畜や養鶏で生みだされる有機肥料とまぜあわせ、さらに竹炭製造時に副次的に出来る竹酢液等も加え、林地や畑地にすぎ込むことによって素晴らしい土作りが可能になる。

サン・パウロ州バストス市では養鶏が盛んで、一〇〇万羽の鶏が排泄する糞は年間一八万トにも及ぶ。この地方は砂質土壌のため、農耕に適さない土地が多かったため、養鶏が盛んになったのであるが、この大量の糞と竹炭を利用した最

写真 アクレ州シリングル・サンフランシスコのジャングル内で見つけた巨木

もプリミティブなバイオ・マス計画を目下立案中で、豆科植物との組合せで、その効果は絶大なものになると予想される。

上の写真に見る巨木はアクレ州の原生竹林の調査の折、ジャングルの中で見つけたもので、根回り二四mある。上右の写真は昔のブラジルで森林の中の巨木の調査の情景を絵にしたものであるが、誇張ではなくてこのような林分が存在していたのであろう。このような森林にお目にかかるのはブラジルにおいてもめったにないといつてよい。

乱開発から守る手段を

日本の約一〇倍の国土を国民の％で占有している国であり、国益や公益より、個人の利益が平気で優先される国である。ブラジリアン・ローズウッドなどの銘木もそれを主に産出する州政府が丸ごと、外国に買収されて、根こそぎ持っていかれるという国でもある。これまでのブラジルの歴史は国家というレベルではなく、個人の利益を国家ぬきにして優先させてきたが、八五年から始まったタンクレイド大統領に続くサルネイ政権から、ブラジルの本当の意味でのナショナリズムの台頭が見られるようになってきた。

国家としての意識もかなり明確になってきたので、これまでのような野放図な政治は影をひそめるとともに、素晴らしい国家作りが始まるうとしてゐる。今年三月初めに行つたドラスティックなインフレに対するショック療法が成

功したかどうか不明であるが、とにかく国家としての自覚が明確になりつつある。私が一年間滞在していた折、有意の人々から聞いた話はブラジルを支配する人々の政治の悪さに対する絶望感であった。国家の利益という名目で、為政者達が私欲を追求する図式は我国でも全く同じであるが、ブラジルの場合は国が広い分だけ私欲の大きさは茫々として広がってしまふ危険性がある。

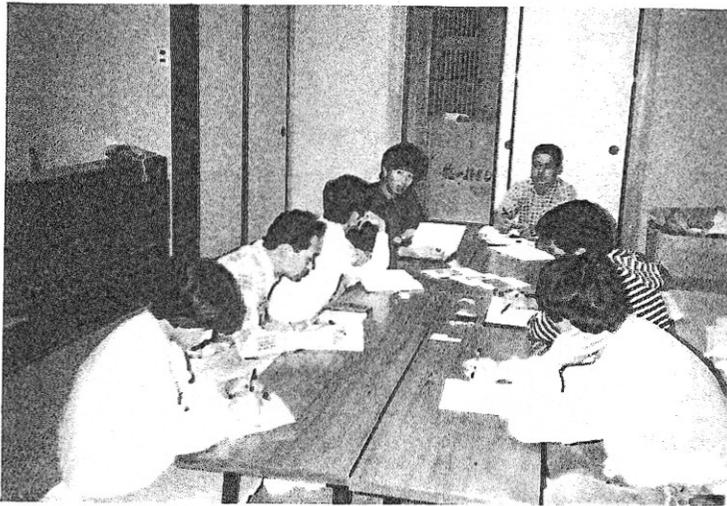
日本以外で我が同邦が一番多く住む国であり、ブラジル社会に大きな影響を持つまでに育ってきている。このような大切な国に対してただ単に経済的利害関係だけの小手先の仕事ではなく、地球レベルでブラジルの森林を乱開発から守る施策を総合的、統一的に行えるよう、しっかりと視点に立って協力していくことが今一番我国に求められているものであろう。

経済成長のために東南アジアの森林を直接、間接破壊してきた我国が今また、ブラジルの鉄鉱石の利権を手に入れるための森林破壊に官民一体となって加担するようなことがないようお願いしたいと思う。

森林破壊の結果としては文明の崩壊につながっていくことはこれまでの歴史が証明している。二度も三度も同じテツを人類は踏みつづける必要があるのだろうか。

山村に働く

若者の意識を龍山村にみる



山村に若者がいない——。森林と林業を支える担い手の不在を憂う声が山村のあちこちで聞える時、「今年で九年目、もう四十人もの若者が村外からこの村で働くようになった」という静岡県龍山村。そこで、山村に働く若者は何を感じているのか、龍山村森林組合で働く若者と、首都圏で働きながら、群馬県の山づくりにはげむ森林クラブの若者と話し合ってもらいました。

取材者メモ この座談会は、土曜日の夜、龍山村森林組合で開きました。土曜日というのに、仕事を終えて帰ったのが、午後六時すぎ。夕食をすまして森林組合の事務所に集まったのは、七時を過ぎていました。取材の日は、自主研修の日で、当日は「スギ」のテーマで話がすすめられました。

水河期からのスギの話が始まり、天竜地方のスギ造林に力を入れた金原明善翁のことまで、討論を混えながら——。そして座談会の始まったのは九時前。翌朝の日曜日は作業日というのに、熱っぽい討論が続きます。

記者はこの座談会の前に青山宏組合長に四時間余り取材しました。その組合長の言葉も入れて座談会をまとめてみました。

司会 まず初めにどうして山にかかわるよう

なったか——を話してくれない。

山・緑へのあこがれから

今井 先生（日大林科）に紹介されて。父親がサラリーマンをしていて、営業畑でしたし、香港に単身赴任するなどどうしても会社中心になつてしまふのを見ていて、ボクにはできないと思った。会社訪問で七五三のような服を着るなんていやだもの（笑い）。自然保護へのあこがれもあったし——。最初はアフリカへ行ったかった。

鈴木 家は愛媛で林業をやっていますが、次男だし、林業をやるうと思っていなかった。林科はでしたが、お見かけ通り「きゃしゃ」な体でしょう。公務員にもなれなくて、若い人がい

るから行ってみる——と父にすすめられて五年前、龍山へ。一年のつもりでしたが、夏まで体もったので、そのまま。組合長が心配して天龍へムコ養子に世話をいただきました。組合には三年つとめ、現在は、自分の家の仕事をしていきます。

松岡 今年四月にここへ来ました。その前は本屋にいました。本屋を辞めたい気持はありましたが、山をウロウロしたり、田舎を自転車で行くことが趣味でした。仕事を変えるなら、山の仕事か農業をしたかったのですが、自己資金

出席者（発言順・敬称略）

今井保隆（27）大学の先生の紹介で。

鈴木耕治（29）愛媛出身林科の大学卒。3年間

森林組合で働き、今は地元へムコ入り。

松岡学（35）本屋で働いていたが、山の中の生活を求めて4月に龍山村へ。

長坂三九子（21）金融機関で働いていたが、山への思いがつのって来村、ことして3年目。

木村晃（33）名古屋の生協で10年働いて、好きな山に入って2年目。

半田光志（23）大学の先輩がここで働いているのをテレビでみて、今年から入村。

吉畑克規（25）龍山村の新聞記事を見てあこがれて入って2年目。

田中宏（28）大学時代からボランティアで植林。造園業のかたわら、同好の人とクラブ結成。国有林を借りて造林。

もないので——。二年前に朝日新聞にこの記事が出たことがきっかけで龍山へ来ました。長坂 民間企業にいました。自然を守ることに近いことをしたい——と思い、このことを伝えたテレビを見て決心しました。

木村 名古屋の生協で十年働いていました。山が好きで良く山に行きました。山の仕事をしたいと考え、探していましたが営林署にも入れないし、他にも手紙も出しましたが、返事もなく返事をいただいたここへ来ました。ボクの生れたのは岩手県の沢内村で中学一年の時に一家で浦部へ出てきました。何年かしたら岩手へ帰りたいと思う今日このごろです。

半田 テレビでこの紹介があつて、その時先輩の今井さんがテレビに出て——。流れ作業はやりたくなかったし、山で働きたい——と思つて今年入りました。

吉畑 文系の大学にいた三年の時、新聞で龍山村のことを見て何気なく切抜いていました。やはり関心があつたのでしょう。その後、組合長の「ある山村革命」（青文社）を読んで決断して入りました。二年目です。

組合長独白 都会から来る若者に共通しているのは①飽食の豊かな時代がいつまで続くのか、②自然破壊は人類の危機、③戦争などへの危機感があることです。合理化された近代社会で満されないものがあ



青山さん

る、近代社会の矛盾は人口の集中したところにある、山の生活こそ人間の幸せを取り戻す——という気持があります。予知能力を持った人たちですね。

この若者たちは、おとなしく、まじめ、よく働き、挫折しない、生涯を山で終る、金銭にこだわらない——という共通点があります。

田中 森林クラブは、都市に住む人たちが「山のことを手助けしたい」ということで作られました。初め、林業労働の手助けをしていましたが、部分的にかかわるだけで責任も余り持てない。そこで活動の基盤を群馬県下仁田町におき国有林を借りて、造林を始めました。民家を借りて、泊り込んで作業をしています。

山づくり専門といかない悩み

司会 そう思うので山に働いてみてどうですか。落差なんかあるのじゃない？

鈴木 組合に入った当初、村内の森林組合の仕事が少く、伐木・造林以外の仕事が多かった。松喰虫の駆除、造園抗づくりの手伝いなどいろいろ点では初心からみてさみしい気持もした。

今井 ボクの場合も組合にはいった当初は、山仕事は半分で、しかも村内は二割く三割であとは村外。植栽が終わってから松喰虫の処理にいったが、松喰虫は枯れた木を伐って薬をかけるが、効果はない。虫が入ったと思う木を伐って防除すれば効果もあるのだから青いうちは伐れないからむなし。

17



今井さん



鈴木さん



松岡さん



長坂さん

それに、あの葉の匂いがいやで気持ち悪くなる。暑い五―六月に合羽を着て――。ボクはかぶれた。みかん園や田圃の周りにあんなきつい葉をまいて大丈夫かな。遠くへ出ると朝早く、夜は遅い。車を運転して仕事をして帰ってくると何もできない。海岸防災林の松の手入れは遠かったが納得できました。今の林業、組合の現状を考えればしかたのないことだと思おうのです

が……。

木村 山村で暮してみたかった。自分で食事をつくるのが面倒で寮に入ったが、最初アキ缶拾いが仕事でびっくりした。村外へ仕事に行くと、通勤に時間がかかり自分の時間が少なく最近、本もあまり読めない。近く工場用地のため山林の伐開をするようになるとも聞いているが、自分の好きな雑木林がどんどん減って行く、そんな仕事をするのは割り切れない気持ちです。しかし、生活のためと思っているが……。

都会の方が、無農薬・自然食品が食べられるが、ここでは、そうした食品は自給しない限りムリのようにです。あまり都会の生活と変わらない所が多い。

組合長独白 百三十二人もの人間の年間の仕事を探すことは大変。いまは、村内の仕事は三分の

一、あとは村外で働く。仕事も山づくりだけでなく、林業技術の生かせるものならやっていくことにしている。

松岡 ボクはやっと仕事が変わってホッとしている。なにごとにも勉強で仕事に不満はない。半田 一ヵ月しかたってないので――。五月の休みに故郷に帰って、植付の話を友人にしたら、みんな興味深そうに関心をもっていた。いい仕事だと思ふ。ただ、植付も機械的で「何本植えよう」といわれると、能率ということがわかっていても、ちょっと……。

吉畑 一年やってみて、村内での地拵・植栽・下刈・枝打が四分の三で、満足です。

ボクたちにあるのは労働力だけ。いわれた通りにすることは自主性がないように見えるが、なんでもやることは大切ではないか。疑問はあるがやってみよう、やってみなきゃ文句もいえない――という気持ちです。

ハチにさされたり、虫にかまれたりするのはいやだが、大空の下で汗を流すことはいい。しかし、村の人は都市の生活を追いすぎていて。残念な思いがする。

組合長独白 都市から来た若者には、「限りなく進む『文明』と都市生活の中に充実した人生はな

い。充実した人生とは汗を流して働くこと」という意識があるようだ。彼らのそうしたものをトータルに受入れていきたい。

今井 ここでは造林班は二―三年までで、その後は林産班で伐採出材に廻る。素人のボクたちの面倒をみることで、班長の収入は減る。そうした出来高賃金の矛盾で、体力的にもきついが、山仕事が好き――というより最近「やらねば」という気持ちが大きくなってきたように思う。これから、勝負だと思ふ。

取材者メモ 今回の取材の中で「チェーンソーの間規制はやっていない。年間一〇〇日以下だし」「刈払機の方は一日中使っている」ということも聞きました。座談会にてた人は「あれの規制は国有林だからやれる」といっていましたが――。

家と土地、そして定着が

司会 そこで、今後のことをふくめて話をしてほしいのですが、まず長坂さん。

長坂 やつとなれた時で、これからのことはわかりません。でも女の人がもっとしてほしい。いまは三人ですから――。

木村 山仕事を一通り覚えて、自給自足してみたい。

松岡 住みつきたい。空き家と畑を手に入れて――。暮していけるかどうかからぬが、森林組合の仕事のほかに一つぐらい仕事をしてみたい。木工なんかいいと思う。

今井 林研グループもあるが、土地もないボクたちのような者の立場は、本来の林研の性格と

異なると思う。そんな問題を克服することも含んのお宅で木工なんかもして遊んでいる。いまは女房（森林組合の職員）の家にいるが土地と家をもち山仕事をした。しかし、その前に五十年で山仕事のできる人がいなくなるのではないか。すると、山で働く技術を今のうちにどう伝えるかなんだ。ボクは山も土地もないから山にいたいと思えば「技術を売って生きる」しかない。それが林業で「木の文化」に加わることだと思ふ。

林業、特に伐採・出材の技術はいま学ばないと伝えられないという思いがある。「木の文化」というが、木を消費する文化は育っていても、木を生産する文化は忘れられている。

都会の人が、山に入るのにはやはり観光気分を脱し切れないと思う。木の文化も、消費だけ見たり……。街の中に木を生産する人はいない。山で汗を流して生活する人がふえて欲しい。林業技術を覚えるのはここ十年がヤマだと思っている。

結婚して、やりたいこともいっぱいあるが、生活のための金もほしい。金の方はなんとか支出（浪費）を減らすことでやっていけると思う。例えば野菜なども市場価格を維持するために、



木村さん



半田さん



吉畑さん



田中さん

栽培のやり方が複雑化している。そうした支出はなくすることは可能だ。

鈴木 ここにいる人は三つのグループがある。地元の人、研修で来ている後継者、都会から山で働くことを求めて来た人——と。地元の人はこちらで働くし、後継者の人はいずれ故郷へ帰るだろう。そうすると、ボクたちのような人間はどこへ行くのか。不安定なんだ。森林組合の賃金は、この地域では高いが、それだけでは生活は苦しい。家とか畑がほしい。ボクのように養子に行くという形以外に、生活基盤としてここで一軒借りて山でなにかやりたい——という仲間の手伝いをしながら「生活基盤を持たない人たちがどうやって山で生きていくか」を一緒に考えていきたい。

取材者メモ 森林組合の賃金は大学卒初任給七千五百円、高卒六千八百円、日給月給。月二十二日以上の稼働が必要。定年六十五歳、雇用保険や退職金（共済）制度はある。休日は第二、四日曜、雨天は休業。

今井 やはり基盤がないと……。家とか畑とかほしい。村の人たちがボクたちを見る目が「腰かけ」と思うのも、家や土地を持っていないからでないか。基盤があれば色々なことができる

し、多少貧乏でも豊かにくらすことができるように思う。その基盤をつくらぬと答えはでない。鈴木 寮生活も都会の人を受入れるために都会の生活様式に近づけようとして努力し、かえって山村らしさが得られない。

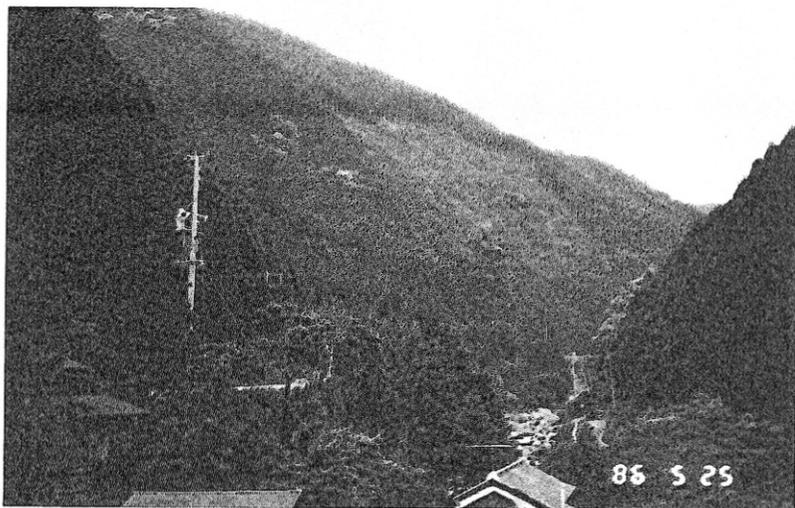
今井 乾燥機なんか便利だからつい使ってしまったけど（笑）。鈴木 都会のサラリーマン生活が山に来たように……。寮が部落から独立して地元から孤立してしまふ。

今井 寮は、一軒借りて落ちつくまでのワンストップ。いきなり自活しても朝早く、夜遅ければ、自炊でつぶれてしまふ。でも倉持さん（千佳子さん）かつて横浜市で出版社に勤め、編集や挿絵を書いていましたが、本当に自然とかかわるには自分で山の暮らしや仕事をするのが一番——と四年前に龍山村に来た）は一軒借りて、近所のつき合ひもしてよくやっている。たまの日曜日も時には道刈りの共同作業でつぶれて本も読めない——らしいが。

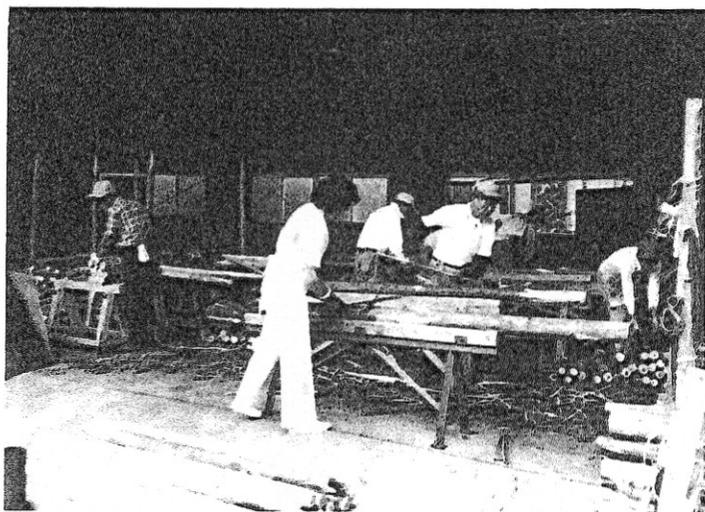
吉畑 寮生活を村の人は「保育園」とみているのではないか。町から来た人は、結局村の中で遊離している。やはり家を借りて落ちつかなければ——。家を借りてやっと小学生、仕事も覚えて中学・高校と育っていききたい。

組合長独白 寮は二棟、いま十七人が生活しているが、森林組合で年間二百四十万円かけている。

組合が赤字の時だから寮は止めてしまえ——という声もある。これを乗り切っていきたい。一昨年中国の研修生を三人七ヵ月引き受けました。



写真左Ⅱ龍山村西川のバス停の両脇にもスギの造林地が迫っている。下左Ⅱ森林組合直営の小径木製材所、下右Ⅱ製材所の上は森林組合の事務所。鉄筋づくりで川向うを通るバスからもよく見える。



国にはそんな施設がないんですね。毎年高校生も実習に來ています。

村内の国有林を借りて山村道場をつくることが夢だ。そこで後継者や山村自治体の職員が昼間働き、夜学習し「山村を再建する」という考えになつたら卒業させる。

いま、龍山村森林組合では二年先の大学卒予定者まですでに就職の「予約」をしに來る状況で、全国の山村の「若者不在」とは違う現象がここでは起きています。龍山村森林組合のこうした実態を国民森林会議で定点観測の一つに加えていただき、全国に紹介いただければ、山に住む皆さんの勇気づけの一助にもなると思っています。

自分がかかわるといふ自負

田中 皆さんの話を聞いて同感です。ボランティアで手伝う。たまに都会から來る人間はどうも地元の人から信用されないように思います。そこで下仁田の国有林を借りて植林をするのですが、三十三戸の部落に一戸借りましてそこを拠点に仕事を始めました。

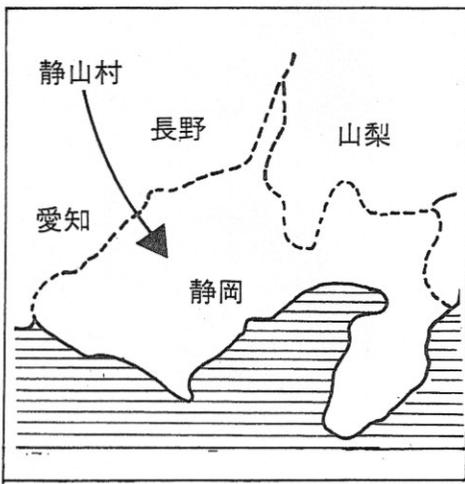
ここで働いた人の名札をいろいろのある部屋に出しますが、百四十人ほどになりました。そのうち大人は百人ほどでしょうか。名札を出すの違いですね。自分がかかわった仕事としてみえてくる。集落の人とも、老人の話の聞いたり、クリスマス会に集落の子どもを呼んだり交流もでき始めました。国有林の借地の作業以外にも、「雪折れ木を間伐してくれないか」という話も來ています。

龍山村森林組合

龍山村は村面積の九二・八%が山林。このうち私有林は四八七畝を占める(国有林一八五畝・県有林三七八畝・村有林一一畝)。二八九戸の林家がこの私有林を所有しており、一畝以下が一〇二戸、一―五畝が一二四戸と五畝以下が圧倒的で、五〇畝以上は七戸。

民有林(私・県・村有林)を合わせた人工林は四八四七畝で九一・九%がスギを中心とする人工林という天龍林業の中心。

龍山村森林組合は、組合員の利用率八五%と、全国平均の七倍という高率の利用率を誇る。作業道も直営でつけ、林道と合せてヘクタール二〇畝。北遠広域圏の中では突出した道網密度であるが、青山組合長は「三〇畝を



めざしたい」という。

六〇年度の事業量は別掲の通りだが、造林・伐出だけでなく、細物の製材工場も経営しており、近在の市町村の間伐木をふくめ四〇〇立方畝を消化し、柱、板、造園用の杭など生産、銘柄化された材に「注文が多く市況の変動にかかわらずなく製品の販売は順調である」(青山組合長)。そのほか、森林組合出資の天龍住宅販売株式会社(22人)は、天龍村の住宅を大工さんを組織して供給。二年前に系列から離れた浜松ナイガイ龍山工場(26人)は、一〇年間森林組合の傘下で稼働、山村の労働の場確保で挙家離村防止の役割を果たした。ナイガイ本社に戻しても「地元雇用は続ける。工場存続」の約束は守らせているという。森林組合(一三二人)をふくめ、傘下、関連の従業員は一八〇人、村内勤労者の五〇%、村内勤労所得の六〇%を占め、龍山村は森林組合で支えられている。一九八五年度の事業

地持	一五畝
植林	二七畝
下刈	一七〇畝
除間伐	三五〇畝
素材生産	一三、〇〇〇m ³
製材	二、四〇〇m ³
杭木生産	二〇〇、〇〇〇本
その他村外の仕事	六、〇〇〇人

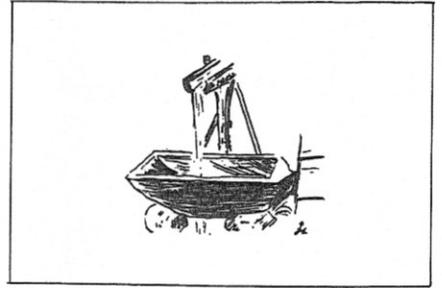
初めの頃は植えることにこだわりました。そのうち育てることに関心をもつようになり、「いのち」にかかわりながら何百年先のことも仲間と話し合っています。いのちと相對することで社会的な年代の差も越えられるような気がしています。

ボクたちのように都市の中にいる人間が山を愛し、山を育てながら自分をとり戻す——そんな山とのかかわり方もあっていいと思う。「三位一体の『いきいき』」といっていますが、山の仕事にかかわることで「自分がいきいき」「地元もいきいき」「森林もいきいき」。それを実感したい。

今井 自分が楽しくなければ——。理くつは後から来る(笑い)。

田中 議論では対立が残ってむなし。仲間と仕事を一緒にすることで一致できる。

会社 きょうは遅くまで熱心でありがとうございました。山村の過疎化がいわれている時いろんな形で山村や林業にかかわることが大切ですが、本日はそんな思いを抱く多くの人に参考になるお話がうかがえたと思います。今後も、新しい山村を模索していく上で皆さんの体験を聞きたいと思います。



いのちたちの樹々

石牟礼道子

(作家)

渚の道を黄昏ごろによく歩く。

家から五百メートルほど歩けば、水俣川の川口に出て海がひらけ、八・九里へだてた対岸に、天草島が連なってみえる。日によって、その奥に頂きがかすんで重なるのが、島原や長崎の山々なのであらう。

渚を歩いていて目に目がゆくのは、潮を吸って生きているのではないかと思える木々の姿である。野生の無花果のような実をつける木が、幾種類もある。季節によってその実を摘んで食べるのは、幼い頃からのたのしみだったが、ぎっしり着いている実よりも、根の形に心をうばわれてしまうのがアコーの樹である。

天草の海岸線によく見られるが、潮の来る磯辺に根を張り出している中に、たいてい八大竜王さまのような祠をおさめてあるけれども、そのさまを眺めていると、本当に海からあがりかけた生命の樹という気がしてくる。

わたしは、こういうおおきな樹々のそばに

いないと、心が酸欠状態になる方で、九州の脊梁山脈をなしている阿蘇・九重高原あたりへも、二ヶ月に一回くらいは出かけていて、山の呼吸にふれて来ては息をつなぐという状態である。

ロッククライミングなどというのはやらないうが、ただただ樹々の中にいるだけで蘇生するのは、幼時岬の繁みの中を出たり這入ったりして、一人遊びをしていたからで、山童と言ってもよい子どもであったからであらう。

海をみると、水俣病を思わずにはいられないので、なんだか錯乱気味になるけれども、山へ行って蘇生したい気持は、当今はやりの、森林浴という言い方ではおっつかない。

この森林浴という言葉は、ひと昔前にあった結核治療法の、日光浴という言葉を思わせるが、都市の人が使いはじめた表現なのだろう。それはそれで痛切なひびきがあって、たとえば森林浴とは、安全な環境のカプセルであるとか、安全な森という名のシェルターで

あるとか、あるいは森林という浴槽だとかいうイメージを喚起する。

けれども、自分自身を山の精のように感じているわたしは、だんだん情けなくなっていく。心も生理も、山とは分離していかないのに、人に頼んでときどき山に連れて行って貰わねばならぬほどに、物理的に山と離れて暮らしているのが情けない。さらにはまた揺籃の海とも切断されているような、この宙ぶらりんの気持をどうやって元に戻せばよいのだろうか。山の頂き近くに行つて海はどっちの方角かしらと、伸びあがつて探している自分に気づく。そして、魚付林ということばを山の上で思い出す。漁師さんたちから舟の上で習った言葉である。

潮風を吸って生きている樹木があるのに対して、魚付林という言葉があるのは、海の生きものたちも、山の影がなくては生きてゆけないということ語っている。雨が多かった年は、山の腐植土が海にどつと流れて来るから、海草の育ちぐあいがよくて、貝のたぐいが、どんなに小粒でも、ばっちり中味がつまつて、雨の年は貝年だというような話もよく聞く。けれどもこの頃、山がやたらと伐られて魚付林、つまり渚の山影をうしなつた魚たちは、産卵場所に困つているというのである。

漁師さんたちの中には、魚の種類別に、さまざまの名人上手がいるものだ。

ある漁師にとっては、紫尾山と天竺山の間、楊梅の木と赤松を結ぶ線に対角の、沖合

何里のところから舟を出せば、そこが黒鯛の通り道だとかいう話がある。車海老とり名人の誰々さんの目印は、あの山の、あの木とあの木との間。蛸とり名人の誰々さんの目印は、何々山の肩と向きあうところであるらしい。いずれも一子相伝の秘密らしいが、なかに息子にさえも、それを教えない漁師さんもいる。

波の色を見て舟を出すのは当り前の初歩で、山を見る目が出てくれば、漁師もまあまあだが、それを他の舟に気取られるようでは一人前とはいえないのだそう。沖に浮かぶ小舟が遠い山々を読んでいたことを、わたしは漁師さんたちに教わるまで知らなかった。

その目じるしの山々や木々がこの頃どんな伐られるようになった。

「魚探を使わねば、魚のおるところさえ知らん若者が、漁師顔をしようになつたのも、魚たちの居住区が、山の変動でめちゃくちゃになつたけんばい」と、名人たちが嘆く。「山の神さまと海の神さまは、春と秋との彼岸に、二度ほど入れ替わられるが、あのようにならぬ宿り木を伐られては、山におられる間、休まり場もなかる。疲れたままに海に来られるわけだから、海での役目もおろそかにならんともかぎらん」。

そう真顔で言われる。海の神さまと山の神さまが入れ替わられる話は、山と海とが、あるいは天と地とが交わしあう、深い呼吸の世界であつたのだ。

シンポジウムつまみぐい

「緑の週間」の四―五月は「森林・林業問題」の行事が目白押し。各地で開かれたシンポジウムの中から会員の発言を中心に拾ってみました。

が生まれてきた。過疎・過密の問題や矛盾から上・下流意識がでてきた。

水や森林、土地などは重要な国土資源だ。日本人はこうした意識が薄く、目先の経済効果だけで開発してきたと思う。今後は資源の安全性と安定性をチェックする際、上・下流の住民が役割りを考えながら、本来の流域観念を見直す中でチェックしていく必要がある。国土管理は行政だけでなく、国民的総意でどうしていくかが課題。

上下流の役割考え資源管理

高橋裕東大教授

昔は流域住民の運命共同体意識が強く、船による交通を守るため水位にも関心を持ち、監視もした。明治以前は水害にも悩まされたが、川とどのように付き合っていくか、上下流で知恵を絞り合った。明治以降の日本の発展につれ、上・下流の流域観念が薄れた。交流は川から鉄道に変わり、治水で川のはんらんが減って住民の流域への関心が急速に薄れた。

高度成長以降のダム建設や水質悪化、流域の都市化などマイナス要因から再び流域への関心

大切な森林の調整・保全機能

堤利夫京都大学教授

森林は水を調整する機能をもっている。それは大雨が降っても出水を抑え、ダムのような働きをすると同時に、水質も調整する。

雨水の窒素濃度〇・四―〇・五ppmも森を通って出ると〇・一―〇・三ppmになる。こうして森に残った窒素やリンが土中の微生物の働きで有機物になり、木に吸収される。一方、カルシウムやマグネシウムなど雨水が森の土中を通ることで増え、酸性の降水が中性に近くなる所もある。森の土壌が水質を調整しているが、

その土は植生の発達、植生は土壌の発達に頼る相互作用がある。

森林を伐採するところこうした機能を変化させてしまう。伐採してもすぐ植える日本の山では回復力があるといえるが、いったん山が荒廃するとやっかいなことになる。琵琶湖南岸の田上山は千二百年も前から都の造営のために乱伐がくり返され、はげ山になり土砂の流出をくり返して大きな被害を出しつづけた。明治以降の治山でようやく流出の被害が減ってきたが、森林をつくるには長い時間がかかる。森林・土壌を半病人のような状態においてはいけない。急斜面の多い日本の山は山地保全・水の保全という面からも森林の存在意義は大きい。

森の恩恵守り上下流の連携

福岡克也立正大学教授

昔は社会的共同体として川上と川下、森と街はつながっていたが、自動車などの交通で疎遠になってきた。

人間は緑と水が調和しなければ生きていけない。文明が発達したいまこそ緑と水がいかに重要かを考え直さなければならない。森の恩恵は、

(朝日新聞記事から要約)

森林の土壌は四百億トンの水を溜めるが、これと同じダムを造れば毎年四兆一千億円が必要。土砂流出を防ぐことで九兆一千億円、炭酸ガスを吸収し酸素を生産するが、大気浄化サービスは六兆五千億円、洪水防止の出水調整で二兆円、森に住む生物のエサ代でみて二兆円、保健休養機能で七兆四千万円と計算でき、合せて三二兆円のサービスを毎年与えてくれる。

こうした緑を国民共有の遺産として後世に残し伝えなければならぬが、そのためにも山村の人たちが希望をもって緑を育てることができるようにもしなければならぬ。その恩恵は都市の人も受けるわけで、そうした中で都市と山村の新しい関係も生まれる。こう考えると水と緑はこれからの文明を変える大きな力となる。

社会党・総評は5月13日東京・日比谷公会堂で「森林と木・山村と都市をつなぐフォーラム」を開き、中村靖彦NHK解説委員の司会で大石武一緑の地球防衛基金会長、石野元和前奈良県林務長、脇元裕嗣林野庁林産課長のほか会員の横村掛川市長、大内東大名誉教授らが出席して討論をしました。

地方文化育てる木造住宅

榛村純一掛川市長

木造住宅は地方では作られている。地方文化の象徴である。しかし、本来百年は持つ木造住

宅に対しユーザーは「三〇年持てばいい」といい、林業家もそれに流された木材供給をしているが、本質を忘れたやり方で真の需要は拡大できない。

市の目抜き通りに木レンガを敷き、街路樹のワクも木製、市民病院も木を十分使った内装にした。病室は戸、障子だ。溪流魚を育てて、泳ぎができ、都会の子どもがキャンプのできることも考えたい。

いまは、育てることは業とまらない。林家は倒産状況だ。しかし、除間伐は伐りすてでもやらねば森林づくりはできない。日本人は水と森林を区別しているが森林水資源というべきで一体。都市は上流に自ら都市林を持って、森林育成の苦勞を味わうべき。国有林は国民有林として開放して、育てる特別会計にしたらどうか。

女性が山林経営に当たれるように女性作業班を作っているが、定着できるように都会のOLなみの年金を保障してほしい。また、食生活運動と山村運動を結びつけ山間農業を復活させたい。森林組合を強化して地方文化を育てる核としたい。

後手後手の外材対策

大内力東大名誉教授

森林に手を加えぬのが自然保護という人がエコロジストに多いが、木材で生活している何百万人の人の生活や、緑を保全し山林に活力を持たせるには、木を伐って林業を健全化すること

が大切。国有林のブナ林の乱過伐など問題もあるが、民有林の間伐不足や里山のかつての薪炭林など手入れが急がれる。

国有林も会計制度の不合理さの中で赤字になり借金返済で山の手入れがおろそかになっている。国有林・民有林を通じての林業の不況の原因は無秩序な外材の輸入にあるが、外材対策は腰が定まっていない。特に南方では資源が底をつくの餓餓輸出をしているが、南の経済を自立させ、南の経済を世界経済の中に位置づけることが大切。米国の貿易摩擦解消の圧力は不合理で、仮りに輸入が倍になっても二〇億にしかならぬが、日本の外交は受身後手になっている。

5月17日、奈良市で「奈良県の森林・林業を考えるシンポジウム」(実行委代表 平田善文 奈良教育大教授II会員)が開かれた。パネラーには会員の半田良一京大教授、中川藤一中川木材店社長が参加し、県・自治体・森林組合・林業界らの代表と共に「よみがえれ、森林王国なら」をめざして討論。

時代拓く林・材産業を

半田良一

林政審の中間報告では、森林に対して国土保全の構成要素として、環境財としても重要であることを強調している。林業白書もはじめて、

人工林化が過度になったのではないかと云って、森林整備の新たな展開を指摘している。

森林の位置づけが変化しているが、林業の発展の中で、森林（環境）も維持されるという、木材産業も含めた林業、林材業のあり方を考えるということから出発し、問題提起したい。

日本は資源が乏しい中で、すぐれた技術を活かして外貨を稼ぐという貿易立国として高度成長をしてきた。今日、国際収支の大幅な黒字のため、木材などの輸入の拡大が求められているが、輸入にばかり依存するという経済は、やがて、国内に存在する資源をできるだけ活用し、これを拡大していくことに目を向けなくてはならない時が来ると思う。

国土の六七％を占める森林が、需要がないからと言って放置されたら、国土の荒廃が必ず起きる。

戦後の燃料革命で、成長量も大きく、経済面も有利な人工林化が急速にすすんだが、この莫大な面積の人工林が、いま厳しい局面に立たされている。

日本の木材産業の大部分は、中小企業である。山林の所有者は二百五十万人。製材業者は二十万人。いまの林材業の危機をきり抜ける「フロンティア」は、この製材業の人達ではないかと思う。

国産材の需要の拡大が問題になるが、昭和三十年代は売り手市場であったが、四十年代から買手市場に変化し、特産地化など対策は高まっている。新建材や、集材材など国産材のバイ

を大きくする思いきった工夫が必要だ。その力がこの製材業の人達に期待できるのではないか。外材に負けない日本一の良質材として、吉野や北山の木は、まだ通用しているが、二級品はすでに影響を受けている。

工夫と努力をしないと人々が、国産材を使ってくれないのは当然。例えば、流通の面では、注文にすぐこたえられるような体制、規格の品ぞろえというような点で、近代化が遅れているし、コストダウンの努力が求められている。

コストダウンの問題では、伐出業ないしは森林経営者も努力しなくてはならない。いままでも、良質な吉野の材は、売り市場の働きで高く売れ、県外からも材が流れこんでくるような状況はあるが、さらに需要の拡大のために流通業と製材業が、手をつないでコストダウンをはかる必要がある。

新しい産地では、例えば九州の都城などでは、商取引の近代化に努力しており、古い伝統的な産地も安閑としていられないのではないか。

山村対策の問題では、ヘリコプター集材など機械化により雇用量は減っているが、伐出作業の合理化はやらなくてはならないことだから、山村の雇用を増大させるためには、森林を利用した新しい産業を起こすなど、複合的な山村構造をつくらないと山村はやっていけない。

森林法では、森林施業の十年計画をたてることになっているが、いま山持ちが木材価格が低いため伐りおしみをする傾向がある。したがって森林計画と伐採の実行量との差が出ている。

これを林家の主体制に立った計画になるように十年計画を二十年にするなどの再検討も必要だ。また、農山村の振興のためには、森林組合の育成が必要で、これまで育成のかけ声は古くからあったが、「組合のための育成」だったように思う。小規模山林所有者は、施業を森林組合に委託するという形をとるなど、具体的な育成策をとって、農山村の荒廃を救うという方策をとるべきだ。

流通側からの要望

中川藤一

日本経済は曲り角にきていると言われ、林材業も同じで、この状況にどう対応するかが問題となっている。大阪の木材工業団地では年間二万五千戸くらい住宅をつくっているが、その技術本部長は、「一時期より随分、木材部分が増えており、特にフロアに木材を使うという傾向が出ている」と言っている。

業界には「住まい方コンサルタント」なるものが出現し、家族構成や、生活様式を土台に、家作りと暮らし全般にわたるアドバイスを行っているそうで、まさに「分衆の時代」「個性の時代」の到来といえる。

消費者から「国内材は三mと四mの二通りしかなく、種類が少ない」と言われていた。米材は九mだから、どういようにも切れるので便利だという。日本の材木も十年前くらいから売り手市場から、買い手市場になっており、最近

では、注文に応じて山元で採材するという業者も出てきている。

森林組合が家具づくりをやって倒産した例もあるが、われわれは川を下っていかなくてもやることがある。消費者の美意識の向上と、嗜好の多様化に沿った対応が迫られている。

内地材に対する人気は根強く、木造住宅産業協会のアンケートでは「内地材を多く使いたい」とする回答が五六%で、外材（同結果九%）に比べ、圧倒的支持を受けている。樹種では、百人のうち八十人までがヒノキを多く使いたいと言っている。

集成材にも著しい発達がある。消費者の中には集成材を、木くずが張り合されている欠陥商品だと、勘違いしている者もあるが、いまでは体育館もつくられているし、建築屋さんが「これなら自由に使える」と言っている。少しづつ集成材を使った大きい建物が増えている。

円高によって、外材の値段が下ってくるが、それは全部山元へしわ寄せされてくるだろう。米材は、 μ 当り九千円くらいで、山元から日本の製材工場に届くが、内地材は一万二千円から、一万五千円くらいかかるといふ。吉野材は高級材だから、 μ 当り二万円でも吸収できると思うが、九千円までにはできなくても、このままでは競争に勝てない。

内地材は山元から、需要先が近いわけだからここに工夫を加えれば、十分競争していける。色合いの変らない吉野スギ、磨き丸太、小径木の工夫など、日本にしかないようなものの需要

開拓が有効ではないか。

いま木材業界は苦しい時だが、最近、PTAのお母さん方の間に、びっくりするほど木に関心をもっている人が増えている。木材に対する一般大衆の興味は強いので、工夫をし、努力をすればいつまでもこんな状態がつづくとは思えない。

第3回森林(やま)・緑・水を守る九州討論集会在、5月23日熊本市産業文化会館で開かれ九州各地から加人が参加しましたが、この集会には国民森林会議の大内力・真砂典明両会員がパネラーとして出席。

いま一つのプラスαを

真砂典明

昭和三十八年以降、和歌山県竜神村で仲間と共に林業経営にたずさわってきたことについておべてみたい。

昭和四十四年、仲間と共に林業懇話会をつくる。翌四十五年、村の助成もあって林業開発会議ができた。これには、営林署の担当区主任、村、議会、農協の代表などが加わってきた。

主な活動としては、①林業広報誌を年四回発行し、村の全戸に配付。②林業移動相談を座談会方式で二十三ヵ所で行った。③四十七年以降、林業まつりを毎年実施してきた。

真砂林業としては、林業後継者対策のひとつ

として雨ふり対策の木工品づくりをとりこんできた。磨き丸太工場のフル活用によって端材、小径木利用の製品を木材と他の組みあわせによりつくっている。タイムンやキーホルダーなど一例をとっても、宝石に劣らぬ宝木としての価値がある。

林業不振の中で、一人ひとりが自分のもっている力を発揮し、いまひとつプラスアルファを出していったらと思う。

農山村は水・緑・空気は美しくてもトータルとして都会に比して恵まれていない。子供に木と自然のふれあいの良さを知ってもらおうと木工教室を夏休みに開いてきた。今年も開きたい小さな積み重ねが将来の明るい山村づくりに連がることを祈りながら……。

5月24日、仙台市で「緑を守り育てる宮城県連絡会議」(発起人代表菅野俊作長野経済短期大学学長)の結成総会が開かれた。総会後、筒井迪夫東京大学名誉教授が、「森林の役割と国民的課題」と題して記念講演。翌25日には、「豊かな森林・林業を考える」シンポジウムが開かれ、大内力会員が基調講演、自治体・自然保護団体などのレポートを受けて討論をした。

“緑の価値”再評価を

筒井迪夫

緑・森林というものは、“国民の大切な文化

的資産である」ということ。その文化的資産を守り育てることがなぜ必要かといえば、現在はまさに文明の危機であり、人類生存の危機であるからである。

緑には相反する、相矛盾する二つの本質があり、一方では木を伐らなければ生きてこないし、他方では国土保全などのために木をおいておかなければ生きてこないものである。

緑・森林を価値あるためにするには、相矛盾する行動・政策行為を行い、地力維持の観点にたったバランスをとることが重要である。

緑・森林の経済的収益の押え方に大きく欠落しているものがある。それは公共的価値・公益的価値を評価しなかったことであり、今後の運動として緑の価値を大きく取上げていくことが大切である。

「都市と緑」の共存を考える国際シンポジウム「国際グリーンフォーラム」(組織委員長・岸大阪府知事)は、5月9-12日、大阪府で開かれ、海外28カ国と国内の学者や行政担当30人が参加した。会員の佐々木高明国立民族学博物館教授は、第一分科会・セッション3「新しい緑、そして水」の財政長として活躍。

(文責・本誌編集部)

▽お願い△シンポジウムなどに会員が講師として参加される際はお知らせ下さい。発言の要旨を本誌で紹介いたします。

「森林・林業・林産物の活性化と国有林野事業の経営改善に関する決議」が衆議院本会議で15日、参議院本会議で16日全会一致で採決された。本会議決議は三十年振りで、昨年超党派で結成された「活性化議連」などの努力が実ったもの。決議の内容と、それに対する大臣の所信表明は次のとおり。
〈決議文〉緑の維持・培養、水資源の確保、大気の浄化、保健休養、国土保全等森林の有する公益的機能の維持増進に対する国民の要請は急速に高まっている。

しかるに、わが国の森林・林業は木材需要の低迷、外材の輸入、林業諸経費の増高、山村の過疎化、林業労働力の減少及び森林づくりへの意欲の低下等により、健全な森林の育成に欠かれない間伐・保育の遅れがめだつなど、その生産活動が停滞し、水資源の確保をはじめ森林の有する多角的機能の高度發揮に支障をきたしている。

国有林野事業は、長い間、林産物の計画的・持続的供給、公益的機能の發揮、農山村地域振興への寄与等その使命を果たしてきたが、財務事情が悪化し、その改善方策を講ずることが急務となっている。

また、最近の国際環境の変化は、森林・林業・林産物に悪影響を及ぼすことも懸念される。

さらに、近年、森林・緑資源が世界的に急速に減少しつつあり、この状態が続くならば将来において地球規模で環境への悪影響が憂慮され、森林資源の維持・造成は人類にとって重要な課題となっている。

「森林・林業・林産物の活性化」 衆参両院本会議で決議

よって政府は、緑豊かな国づくりと国産材時代を展望して、木材需要の拡大、木材産業の活性化、間伐・保育の促進、林道網の整備等国民参加による森林整備の推進等による森林・林業・林産物の健全な育成と国有林野事業の改善のため、財源措置を含め検討し、積極的な施策の推進を図るとともに、森林資源の維持・造成のついでに国際協力の一層の拡充を図るべきである。

右決議する。

〈羽田農林水産大臣〉ただいまの御決議に對しまして、所信を申し述べます。

政府といたしましては、森林・林業・木材産業をめぐる厳しい情勢にかんがみ、従来よりも各般の施策を推進しているところでありますが、特に、昭和六〇年度からは「森林・林業、木材産業活力回復五ヵ年計画」に基づき、木材需要の拡大、木材産業の体質強化及び間伐等林業の活性化に努めているところであります。

また、国有林野事業につきましては、昭和五九年度に策定した改善計画に基づき、経営改善の推進に努めているところであります。

森林・林業・林産物及び国有林野事業が直面する事態に對処するため、ただいま採択されました御決議の趣旨を十分に体し、今後とも森林・林業・林産物の活性化と国有林野事業の経営改善に最大限の努力を払ってまいります。

会員の所感

民福のため今「お上」が
なすべきことは

工藤俊夫

民福のために今「お上」がなすべきことは。

一、山村へ人を呼び戻す施策の確立。林道の整備（森林の効用から必ずしも私益にのみ資すとは限らない）。間伐材の用途開発。木造建築の自由の回復（明け渡した城を取返す）。

二、われわれの国有林については、先ずわれわれの提言を尊重して貰いたい。更に云えば、お上の意地をあらわにせず、国鉄の轍を踏まず、民営分割を云われないうよう君臨（所有）すれども統治（経営）せずの方向を打出すこと。

国利民福という語を聞かなくなって久しい。戦争以来、国利と民福との「かいり」は著しかったが、戦後その度は狭ばかり本来の姿に近づきつつあったのだが、近來またその度は深くなりつつあるようである。国利は本来、民福に寄与するものでなければならぬ。国利と民福との「かいり」は国利に精進する人たちが「お上」「国」になり代わるところから始

まる。お上が全体の奉仕者であればよいのだが、まゝ一部の奉仕者になることがあるからである。

高度経済成長時代「金の卵」とはやされ集団就職列車で都会へ多くの山村の青少年たちが運ばれた。山村の過疎化、林業の担い手の不足、林業労働者の高齢化はここに遠因しているのではないだろうか。

極端な拡大造林は今や現状の労働力では賄いきれない程の間伐等、撫育のほう大な量を抱えてしまっている。一方、大量の間伐材の生産が予測されていたにも拘らず利用の途を今俄かに模索している様である。

ひとところ「一貫経営」「企業的経営」なる語がはやったが零細所有者の多い民有林にはなじまなかつたようである。一般的に林業とは細々と植え、撫育し、大きくなれば何か使い途が出来るまで伐らないうでいるのが実態ではなかつたか。そこには森林の荒廃など殆ど見られなかつた筈である。

すぐれた民有林地帯を見たあと、いわゆる国有林地帯を見れば、荒廃の感を抱かざるを得ない。広大な一斉伐跡地、所々の崩壊など。拡大造林は当然の経済行為であるが、大面積の一斉皆伐は林業

「国民と森林」編集部では、会誌の企画の参考にするためアンケートを実施しました。その結果をご紹介します。

「国民と森林」アンケート

1. 今までの会報でよかつた記事は

- 専門家による学術論
- 国民のための国有林を(二通)
- 林業関係の新聞の切り抜き
- すべて良い(二通)
- No.8・森林と山村
- No.9・教育問題を考える
- 木材の多面的利用の情報記事
- 提言(二通)
- 山村をゆるがした日航機墜落
- 森林を多角的視点から観察評価されて得るところがある(No.16・渡辺兵力先生インタビュー)
- No.15・森林の中に明日がある」と座談会「山村の明日をさぐる」
- 巻頭インタビュー(本音が語られているとき)
- 切坂森林・林政ジャーナル(地方紙の情報として貴重)

技術上当然さげなければならない筈である。崩壊は起るし、造林不成績地も出る。緑黄色のスギがそれである。ただ林道は伐採搬出と造林の為発達して立派である。国有林は今も大量の伐採を続けており今後も続けるであろうが、外材、国産材共豊富な折なげ生産を続けるのか不思議でない。

(前奈良県林業試験場長)

地球生態系と森林破壊

山田 嗣

地球的規模での環境問題の重要性が指摘され、宇宙船地球号という言葉が使われ始めてから、かなりの年がたった。最近ではあまり話題にもでなくなりつつある。しかし、地球規模での発想は以前にも増して必要となってきた。特に、地球生態系を個々ばらばらに考えるのではなく、土壌資源、水資源、森林資源などの国土資源の生態的に安定した結びつきとして考えることがますます重要となってきた。

森林資源の破壊が耕地の破壊をよび、それがさらに文明の破壊をみちびいた例は歴史にいくつもみることが出来る。しかも、現在おきている森林破壊は、地球規模での人口爆発がその基底にあるため極めて根が深い。焼畑農業による森林破

壊、燃料資源としてあるいは輸出產品として木材を使用するための大規模な森林伐採が土壌の機能低下、洪水の発生、風害による作物への影響という事態を進行させている。また、灌がいによる塩分の蓄積も深刻な問題である。全世界の灌がい地域で少なくともその三分の一が塩分問題の被害を受けつつあるといわれている。世界の食糧生産が第二次大戦後の人口爆発においていってきたのは、戦後、灌がい用地が飛躍的に発展してきたためとされているが、もはやいままでのような用地の伸びを期待することはできないのである。

地球的規模での生態系へのインパクトにもっとわれわれは関心をもちなくてはいけないのである。地球という限られた資源とその生態系に対し、依然として過重な圧力がかけられているという事実を正しく認識すべきである。異常気候のよる外圧に対し地球生態系の抵抗が極めて弱くなっているという事実は、着実に進行しているのである。ここ数年間アフリカを襲ったような大干ばつが再び襲ってきたとき、地球上の生態系の弱い環がどのような破局的な惨状を呈するか考えてみなくてはならない。アフリカの難民問題も重要であるが、それ以上に地球規模での生態系としての対策が直ちに検討されなくてはならないだろう。

2. 今後の会報の改善点は

- 〈企画〉一通
- 〈レイアウト〉二通 ●意見Ⅱ軟く
- 〈増ページ〉三通 ●意見Ⅱ現状で。増ページは不安。

3. 会報の企画で取り上げたいテーマは

- 森林に関する既刊書のリスト・児童向けのものも別に
- 世界の森林の現状
- 森林と動物社会の関連
- 林業関係の新聞の切抜きを増す(今の三倍くらい)
- 年一回タイムリーなテーマで特集を
- 水産と森林―農と森林の結びつきを
- 森林と水、森林と鳥獣との関連、生態系の循環を論ずることが環境の保護につながる
- 世界の森林とその施業をわかりやすく
- 森林地帯への社会資本の投資と効果(林業の生産性向上からみて)
- 提言が国の施策にどう取り上げられたか追跡
- 山村・都市と森林の問題
- 森林荒廃の実態を調査し広く国民に訴えることを会誌のバックボーンにしていくこと
- 世界各国の森林・林業・緑の政策と現状、わが国の森林・林業政策の問題点
- 中国の林政・社会見聞が大変参考になり

(鶴松久総合研究所 代表取締役)

森林こそわが最高の師

今関六也

森林は日本の自然を代表する

日本の自然は、そのままに放置すると国土の八割は森林になるといわれる。日本は海に囲まれた森の国である。この森林を切り開いて農を営んで生活してきた日本民族の生活を支えた衣食住のかては農の幸、海の幸、山の幸である。

この恵まれた自然の幸によって日本人の民族性、つまり肉体的精神的特性は培われてきた。精神的特性は別として、日本民族の肉体的特性に適った生活とは、民族を育てた日本固有の生態系の一員としての正しい生活である。その日本固有の自然を代表する生態系が森林である。

この意味において、日本の森林はもつと大切にされなければならない。心と肉体の古里だからである。また保存すべき森林は高山の森林だけでなく、農耕地はもちろん住居地すなわち都市と同じレベルにある平地林の保存が一層重要といえる。その森林がわれわれの祖先の生活に拘わりがもつとも深かったからである。

自然研究を怠った日本の生物学

正しい生き方といったが、それは精神

的生き方以前の問題として、健全な肉体をつくるための生き方をいう。人間は生物である。少なくとも首から下の肉体は犬猫をはじめ他のもろもろの生物と変わらない生物である。肉体の生活は自然の法則を一步も踏みはずすことはできない。いかに優れた頭脳も肉体が健全でなければ存在しえない。人間が生物である以上その生活は生態系の一員としての生活であり、日本民族は日本固有の生態系、さらに煎じつめれば日本の生物社会の一員として生活しているのである。

さればこそ日本本来の生態系の構造をまず知り、日本固有の生物社会の実体と社会生活の秩序を知ることが、日本民族が日本の自然とともに健全な生活を営むために何より重要な研究課題である。その研究のために、保存した森林は積極的に活用されなければならない。

この研究を担当するのが生物学であるところが不幸にして近年の日本の生物学は日本の自然研究を放棄しつつある。否、それ以前の問題として、自然研究に必要な研究体制さえも整えていなかった。

いったい生物学とはいかなる科学なのか？

わたしは、きのこの今関として多少は知られているが、自分の専門は森林医学であると考えている。医学といっても病気を直す医学ではなく、いかにして健全

なつたが、各国の林政が当面している問題・森林と国民の結びつきを取り上げてほしい

●「山崎良三さんのお便り」のような民有林経営の実態を個別経営の実態として掲載してほしい。

4. そのほか「国民と森林」への注文

- 一般にアピールする内容(例えば、学
校関係など)
- インタビュアーに女性会員の登場を
●会員の活用を
- 同一の執筆者は間かくをおく
- 提言者の感想を会員に求めたことは面
白い。もっと多くの人が書くといひ
- 新聞・雑誌の記事・ラジオ・テレビの
企画で関連あるものリストをつくれ
- 地方自治体の林業・森林・木材をめく
るユニークな施策の紹介を
- 新聞と共催で広く国民からアンケート
をとつては
- 国有林問題を系統的に
- 会員の中で書いたことのない人に原稿
用紙を三〜五枚送り随筆・意見などを
書いてもらう
- 都市住民に国土の森林の実態、森林と
人間生活のかかわり等を理解させる運
動として、講演会をできる限り数多く
実施
- 森林の大切さを小学校の時から教える
よう文部省に働きかけ

な森林を育てるかを研究する医学のつもりである。

植物の病気の大部分は菌の寄生によっておこる。しかし病原菌は膨大な菌群の中の一部で、大部分の菌は森林の生活に無くてはならない生物である。それどころか、敵とみなされる病原菌さえも森林という生物社会の秩序の維持回復のために、重要な役割を果す生物なのであることを知った。病気がかかった宿主の方が実は社会秩序を乱した張本人で、病気は病原菌によってその過ちをたしなめられている姿すなわち社会的制裁の現象とさえ見るからである。

北海道の森林に教えられた生物学

わたしは北海道の森林で、森林の生い立ちと崩壊を見、また二百年をこえる林木の生活を見て、菌なくしては森林はなりたないことを知った。

さらに植物に属するとされた菌は、植物でも動物でもない第三の生物であると考えようになった。このような生物観は生物の生活学ともいべき生態系生態

学が説くところの、生産者(植物)・消費者(動物)・還元者(微生物)なる生物観に示されている。ただ還元者を微生物という曖昧な言葉であらわし菌としないところに、生物を植物と動物とに分ける旧来の常識的生物観から抜け切れない不徹底さがある。

今日、生物を植物・動物・菌に分ける寺川博典博士が提唱する“生物三界論”は着実に地歩を固めつつあるが、無関心の生物学者も多い。

話がいささか脱線したようであるが、生物学の本質にかかわる重要な問題である。生命の本質を探究するのが生物学の窮極の目的だとする生命学的生物学者には動・植物の区別さえも不要だという人がある。そういう妄言をばく人は生命を知っても生物を知らない人である。

わたしの結論は、“生物学は生命学ではなく、生活学である、即ち生物がどのような生活を営んでいるかを明らかにし、生けるものとしてこの人間が、生物界において自然界において、いかに生活するべきかを学ぶ科学”であるとす。首か

ら下の人間が営む生物としての理に適った生活とは何か、それを首から上の人間が考える学問なのであるともいえよう。わたしは北海道の森林の中で、菌研究を疎かにして些かな痛痒を感じていない日本の多くの生物学者と、菌を通して森林の生活を学ぼうとしたわたしと、両者の生物学観に大きな違いがあるのでないかと考え、苦しみ、思索を重ねた。その結果、生物学は生活学であって、生命学はその部分であるという確信を持つに至った。

日本の生物学界が菌研究を疎かにしたことは大きな欠陥だといわねばならない。それでは自然の研究はできないからである。わたしは農林学界育ちであるが、基礎生物学の健全な発展なくしては、農林水産学はもちろん、医学などの応用生物学の健全な発展はありえないことを確信する。

一介の生物学者であるわたしにとって、森林は最高の師であった。

(元日本菌学会会長)

会員の消息

菊田一夫演劇賞 俳優の八千草薫さんが、「菊田一夫演劇賞」を受賞。東宝劇場での『女系家族』『江戸の舞踊会』の演技に

たいして。

日本建築学会記念文化賞 建築学会が創立100周年を記念して「わが国伝統技術の

継承・著作・町づくり等を通して広く建築文化の向上に貢献した方」(会員外)に文化賞を贈呈。青山宏龍山村森林組合

会員の出した本

長は、「木材資源の涵養と後継者の育成」の業績で受賞。

木材建築フォーラム発会 4月22日発会。「みどり保全と木材利用」で大内幹事が

記念講演。

再考 日本の森林文化 会員の市川健夫さん（東京学芸大学教授）が、斎藤功筑波大学助教授と共著でNHKブックスとして刊行（700円）。

「日本の森林的土地利用は……大きな転機を迎え、また山村の多くも過疎化している。この段階に当たり、森林文化から日本人の生活との関連について考察を試みた」（はしがき）のが本書。著者は、「照葉樹林文化論」…のアンチテーゼとして「ブナ林帯文化」の研究に着目」（あとがき）したのですが、ブナに代表

される落葉広葉樹林帯はもとより、照葉樹林帯をふくめて、山と日本人のかかわりを古代から現代にかけてあらゆる角度から拾い出してみせてくれます。「高度な機械文明が発達したこんにちほど、自然に対する回帰が強まった時代はあるまい」（あとがき）という中で、日本人の豊かな創造性を再確認させられました。巨樹 会員の八木下弘さんが写真とエッセー集を出発されました。（講談社・380円）。

「全国に点在する古樹・巨木を求め歩いてから、早くも三十年」、二十数万キ

ロを行脚して撮り溜めた中から四十七本を本書にまとめています。新書版ですが、白黒版で紹介した中からカラーで三十二本が紹介され、孤高の厳しさの中にも美しい巨木の姿を伝えていきます。

紹介された木にまつわる伝説や、「三年かけてとった三春の滝ザクラ」や「二世のクスノキを植えた持ち主の愛情」（加茂の大クス）など撮影のエピソードも語られていて、作者の木への思慕が伝わってきます。

自然と労働 会員の哲学者・内山節さんが1月25日農山漁村文化協会から出版（1200円）。

「哲学の旅から」という副題がついています。「哲学」という言葉に身を固くしそうですが、信濃毎日新聞に二年近くにわたって連載（「現代への旅から」）したものだけに、すつと入っていきける語り口で、労働や農山村の事象を考えさせます。カブト虫を「修理して下さい」と頼む子供に、「修理した」と別のカブト虫を与える仕事をさせられる店員のエピソードから、「意味ある労働」を問い（存在の無意味感、生きることの意味）、「山

村に帰りたい」と思う若者を拒否しているのは「都会で成功してほしい」と願うする老父（山里が減ぶとき）という事実も紹介。新興宗教の動向から「価値観の転換が迫られている時」が現代の日本とみている（「現代への旅から」存在と意味）この本は、新しい労働や農山村の再生を問いかけるものといえます。

いま、食い改めるとき 会員の安達生恒さん（前島根大学教授、社会農学研究所主宰）が、ダイヤモンド社から出版（1200円）。

全国各地から足で集めた「菜づけ・肥料づけ」の農業と食糧のお寒い実態を紹介し、「食べる側は“食い改め”よう。つくる側は“つくり改め”よう。そして双方ともに“悔い改める”」（あとがき）ことを「食と農への私の提案」（本書の副題）としてまとめているのです。

「いま、村で」は農村での事象の紹介を通じて「ほう、そこまで」と思うものばかり。「農村を都市化し、農業を工業化することが世の中の進歩」（終章）と考えてきたことへの反省がつきつけられる一冊です。

切り抜き森林・林政ジャーナル

地方新聞・この三カ月

1月～3月

1月

山陽新聞 ヒノキ製増える 津山ハンドバッグ見本市始まる(15日)

新作のハンドバッグを一堂に集めた「津山ハンドバッグ見本市」(津山ハンドバッグ工業協同組合、津山地域地場産業振興会主催)が十三日から二日間の日程で、津山市上河原の同協同組合展示場で始まった。

同市内と周辺部にはハンドバッグ製造業者が十五社あり、手編みハンドバッグでは全国のおよそ八〇%のシェアを占める。見本市は春からの需要期を前に卸業者に新作を紹介する目的で毎年開かれている。会場には、十一社が出品した六百点を展示、大半は手編みハンドバッグで、一部布製、ヒノキ製も並んでいる。大阪や兵庫、九州などから卸業者が相次いで訪れ、一点一点手に取って品選びをし、商談に花を咲かせる姿も見られた。

今年の特徴は、昨年からの販売を始めたヒノキ製のハンドバッグが増えたのと、手編みのハンドバッグにもワンポイントとして木を使っているのが目立っている。また全体的に高級志向が見られ、ブドウや花を編み込むなど、手の込んだ編み方をしている商品が多い。

紀伊民報 間伐材を売り出せ 集成材工場を建設 中辺路町 近畿で初 村おこしに期待(21日)

林業不振の折、間伐材利用を目的にした近畿では初めての町営・集成材加工工場が十八日、西牟婁郡中辺路町北郡で着工、林業関係者から期待されている。

同町は町面積二百三十三平方キロの九一・三%が山林で、うち七七%が人工林という林業立町だが、近年の深刻な林業不振が過疎に拍車をかけているため、尾崎亮作町長、三栖文男町議、全議員と田中淑副町林業課長らが、昨年春、間伐材利用の先進地宮崎県を視察した。

その後、町と議会は工場設置について協議を重ねたが、町内で年間約八千立方メートルのスキ、ヒノキの間伐材が出来て、うち市場出荷はわずか千四百立方メートル、他は山に切り捨てられているため、付加価値のある集成材工場を町営で設置することを決めたもの。

工場用地は国道31号沿いの民用地六千五百平方メートルを借り、工場は鉄骨平屋建三棟で延べ千三百五十平方メートル、乾燥室、天日乾燥場、貯木場など設け、建物の完成予定は三月末。集成材製造機械などの設置は六十、六十一年度の二年継続事業で行う。工場建築費は五千三百万円、機械設備七千八百万円の計一億三千三百万円(国補助五〇%、県五%、町四五%)、全設備完了は今年十月、操業開始は十一月中旬の予定。

原木消費量は年間二千八百立方メートル。製品用途は建築内装板、床板、家具用材など。全国の集成材工場

は宮崎県二カ所と静岡、長野県各一カ所だが、宮崎の原木はスキ間伐材、長野はマツで、同町はスキ、ヒノキが半々だけに有利とみており、十一月操業に備え技術者養成のために関係者三人を二、三月の二カ月間、宮崎に派遣するが、操業を開始すれば十七、八人の就労対策にも役立つと期待されている。

2月

山梨日日 荒れる山 漫画で警告 「山と水」二十六年ぶりに復刻 県治山林道協会(2日)

「山崩れ三兄弟。原野、粗悪林伐り跡。こういう悪い兄弟がいて、これが洪水の元凶だ」。童話風の語り、かっぱの漫画で親しまれた故清水崑さんの挿絵。山の荒廃の恐ろしさを戒めた漫画「山と水」が、県治山林道協会(市川三雄会長)の手で復刻された。雪崩で十三人の犠牲者が出た新潟県能生町の大惨事でも、山の荒廃が改めて論議されている折でもあり、森林関係者の話題になっている。

「山と水」が最初に世に出たのは三十五年六月、現在同協会の常任相談役になっている天野義治氏の尽力で限定出版した。この時の一冊が事務局の書庫から発見されたのがきっかけで、「現在にも十

分通用する」と復刻版を世に出すことになった。昨年暮れは水源税創設論議が盛んに行われており、「宣伝戦の強力な武器」(市川会長)との思惑もあったという。

漫画は「悪い三兄弟」が「自分の体から土砂、石塊をどンドン掘り出して下方へ押し出す」ことを指摘、「この土砂が河床を押し上げ洪水を引き起こす」と訴える。さらに「政治家をはじめ多くの私たちは、下流の手当てばかりを考え、上流に目を向けようとしな」と嘆く。

同協会は復刻本を五千部作製、県内の全中学校、県、市町村、森林組合、林野庁などに無料で配布した。市川会長は「今考えなければ百年、二百年先にはもっと大きな憂いを残すことになる。特に漫画世代の中学生に訴えられれば」と話している。

中国新聞 ヒノキの復層造林に挑戦 福山営林署 高低交ぜて育成、効率よく保水にも一役(4日)

自然に近い方法で効率よく木を育てる復層林方式によるヒノキの造林に福山営林署(斉藤俊夫署長)が取り組んでいる。復層林とは高低二種類の林が同じ場所にあ

る状態で、この方法を本格的に導入するのは県内で初めて。復層林の造成が進められているのは吉備高原の北の端、神石郡神石町にある京山国有林の八・一畝。なだらかな斜面に六十年生のヒノキ人工林(平均高さ十五畧)があり、地表には自然に生えたヒノキの苗木(高さ約一・二畧)が茂っている。

方法は、樹齢六十年前後の人工林(親木)のうち約四割を伐採し、自然に地面から生えてきた次の世代の苗木に光を当てて生長を促す。苗木が生長した後、高い林を形成する親木を必要に応じて伐採していく。こうして一つの土地に高低二層の林ができる。低い林が成長して高い林に変わるまで約百年かかり、そのころにはさらに次の世代の若いヒノキ林が育っているというわけだ。

復層林方式だと、神社建築などに使う大きなヒノキからステッキ用まで幅広い木材が提供できる。常に木が植わっている状態なので水源の確保や土砂の流出防止にも役立つ。また皆伐方式に比べて苗木代や植え付け費用などがかららず、同営林署の試算では一畧当たり約五十三万円の経費が浮くという。ただ、皆伐に比べて運搬に手

間取るため、今年秋までに林道の建設を予定している。

3月

北日本新聞 伐採計画に知床揺れる 「秘境守れ」自然派反発(5日)

日本有数の秘境、北海道・知床国立公園内の原生林を営林署が一部伐採することになり、自然保護団体が猛反発している。原生林の隣には和歌山県天神崎とともに日本ナショナルトラスト運動のしりとなった「二〇〇平方畧運動」用地があり、地元・斜里町は対応に苦慮している。

伐採されるのは知床半島・羅臼岳(一、六六一畧)北側の国有林約千七百畧。森林限界の五百―八百畧以下の斜面にミズナラ、ニレなどこれまで人手が加わらない巨木が生い茂る原生林で、絶滅が心配される天然記念物のシマフクロウやオジロワシ、ヒグマなどが息する野生動物の楽園だ。登山道が一部にあるだけで、環境庁は三十九年に知床半島一帯を日本で最も原始性の高い地域として国立公園に指定、動植物の保護を図ってきた。

林野庁北見営林支局によると、今度の伐採は山の若返りを図るためのもので、六十一年度から十年間でナラなど樹齢二百―三百年の広葉樹を「抜き取り(択伐)方式」で約一万本伐採する。風致を考慮して伐採率を六%以下としたほか、林道を作らずに比較的山肌を傷つけないヘリコプター集材をするなど自然景観の保存に十分配慮した計画になっているという。これについて斜里町は①予定地が当面、計画より縮小された②道路近くは伐採しない―など風致も考慮されており「地元の雇用対策上やむを得ない」(船津英雄町長)と事実上計画を受け入れた形。しかし、伐採地の隣は「知床の原生林をあなたの手でよみがえらせて」をスローガンに斜里町が全国的な募金をして取得し植林を進めている一〇〇平方畧運動地。これまで二万五千人から約二億七千万円を集めたが、目標の七割近い三百五十畧の土地しか買い取っておらず、同町はこの運動に影響が出た元のはと心配している。また地元の自然保護団体「青い海と緑を守る会」(午來昌会長)も強く反発。反対運動を全国に呼び掛けている。



国民森林会議第四回総会

国民森林会議第四回総会は三月二十九日、東京・本郷の学士会分館で開かれました。会員二十三人（委任状五十八人）のほか、オブザーバーとして購読会員三人も出席し議事に参加しました。

開会の辞（志村幹事）のあと議長に田中幹事を選び議事に入りました。

開会のあいさつで隅谷会長は「国民森林会議発足四年をへて基礎も固まった。さらに発展させて会議設立の目的を達成するために努力できる方向を総会でつくり上げてほしい」とあいさつし、つづいて出席会員の自己紹介ののち、議事に入りました。

経過報告は萩野事務局長から別掲の通り報告、決算報告（北村幹事・前号既報）、会計監査報告（近藤監事）があつて、これを承認。

提言案については、「森林の中に明日がある」（大野幹事）「国民のための国有林を」（大内幹事）が、それぞれ原案をまとめた経過とその原案を会員等の意見をふまえて討論され（案）として提起した旨報告、討議に入りました。

- ・森林は最澄、空海の古くから知的センターだった。
- ・提言をふまえてどうするか。

「森林の中の明日」の「明日」は何を示すのか。日本の明日でないのか。

幹 ①「提言」案としては表現上は「感性」を大事にしてまとめた ②森林組合も山村も地域によって差がある。ここではおおよそそのところでまとめている ③今後、黒木会員が指摘している森林の所有権問題は究明しなければならぬ ④山村の人になんとかがんばってほしいという期待を込めてまとめた ⑤山村だけに問題があるのではなく日本全体の矛盾が山村にでている。それをどう克服するかに視点をあててまとめた。

以上の意見を交換後、「森林の中に明日がある」については修正の扱いを山村チームに一任。「国民のための国有林」については、なお意見があれば、四月上旬までに事務局に届けてもらい、その上で必要があれば手を入れることとなりました。（以上の経過をへてまとめた提言は、政府・国会・各関係団体へ四月八日に送付しました。）

つづいて活動方針と事業計画（萩野）、予算（北村幹事）の提案があつて

- ・地方でのシンポジウムを国民森林会議が主催し、ぜひ高知で開くことで検討してほしい。
- ・幹・発足準備がすすめられている「みどりの団

地域では「提言」と同じことをやってきた。それが成功したところ、失敗したところがある。成功したものをどう広げるか、今後の方向を示すことが大切。

体連絡会」との関係もあって、他団体とも連携してフェスティバルなどやりたいので、開催地などについてもその中で協議し検討していきたい。

・プロジェクトが今後究明する「都市空間と緑」の出身は何か。

幹・「教育森林」の討論の時も「都市に森林をつくれ」という意見もあった。その都市の残された空間が「民活」で払い下げられようとしている。西欧の都市森林の状況からみてもわが国の状況は憂うべき問題をふくんでおり、そうしたことを究明して「提言」したい。

原案通り確認。(原案は「国民と森林」No.16に掲載)

「森林や山村問題に関する国民的関心を高めるため広く関係団体との連携強化」という方針について、杉本幹事から「緑の団体協議会」の発足準備、経過が次のように報告され、それをふくめて承認し、提携を深めていくことになりました。

「緑の地球防衛基金、森とむらの会、緑の文

経過の報告

当会議は、発足(一九八二年二月二十七日)後四年を経て、現在通常会員数百二十五名、購読会員数九十三名、賛助団体一団体の組織となりました。

今年度は、「山村問題」と「国有林問題」の二つの課題について、プロジェクト討議と現地調

明学会など、森林・林業の未来を憂う団体が最近できた。それぞれの役割りは異っているが、こうした林業・自然保護諸団体も含めた活動の情報进行交流し協議し運動を進展させるような連絡組織をつくらうという動きが、昨年から出ていた。国民森林会議(発起人・隅谷(世話人・杉本)、森とむらの会(高木(森)、緑の地球防衛基金(大石(神足)、緑の文明学会(茅(筒井)、日本林業協会(片山(木村)、緑化センター(水上(江藤))などが発起人・世話人となって協議をすすめており、四月二日設立総会のめどで準備をすすめている。当会議としても、その一翼を担って役割りを果たしたい。ついで役員選出にはいり、次の役員を選任しました。

役員	
顧問	東山 魁 夷
会長	隅谷 三喜男
幹事	大野 盛 雄
"	大内 力
"	北村 暢

査等を積重ね、かつ当会議内外の有識者等からも広く意見を受けるなど精力的なとりくみをおこない、その成果を二つの「提言」としてまごめ本総会に提起することとしました。

当会議の諸活動に対し、御協力、御支援に感謝の意を表するとともに、この一年の経過の概要について報告いたします。

一、「教育森林」創設にかかる提言の実現への

"	志村 富 寿
"	杉本 一
"	田中 良 茂
"	半田 良 一
事務局長	萩野 敏 雄
監事	内山 武 節
"	土田 武 史
"	市川 健 夫
評議員	黒沢 丈 夫
"	神足 勝 浩
"	小島 麗 逸
"	柴田 敏 隆
"	遠山 三 樹 夫
"	友永 剛 太郎
"	中川 藤 一
"	本間 義 人
"	松沢 讓

最後に半田幹事が閉会の辞をのべ第四回総会を終えました。(五十音順)

とりくみについて
昨年第三回総会で決定した「教育森林」の創設にかかる「提言」については、関係する団体行政機関に送付し、その実現への要請をおこなってききました。

特に農林・文部両省、林野庁に対しては、大臣・長官にそれぞれ直接出向き実現への要請をおこないました。

その後、文部省、林野庁においても、予算的措置や通達等で、当会議の「提言」趣旨についてのとりくみがみられつつあります。また「提言」内容に類する各地方、地域での一般のとりくみも一段と広がり、いまこれらの経験の交流や事例紹介などが必要となっています。

「教育森林」創設も含めた、当会議独自のフィールドを設定する構想の具体化については、地域的な条件等によって具体的な設定段階に至っておりませんが、当面「教育森林」的なりくみをしている地方のうち、その設定、運営等で当会議に協力を求めてきた箇所については、今後連携を密にし、実践的活動をおこなうこととしていきます。

二、「国民の森林を考える」北海道フェスティバルについて

昨年六月二十二日、当会議主催のもとで、北海道及び道新、朝日、毎日の各社の後援を得て「国民の森林を考える北海道フェスティバル」を開催しました。このフェスティバルでは、シンポジウムをメインとして映画会、シイタケ原木の領布、木工品、山菜の展示・即売、パネル展示など多様な催しをくり広げ、また、「すべての力を森林に——二十一世紀のために」の——北国からのアピール——を採択し、参加者五百名が会場にあふれるほどの盛会裡に終り、道民各層に多くの共感を呼びました。

三、課題別プロジェクトチームのとりくみについて

1. 「山村問題と林業の担い手」課題（山村

チーム）のとりくみ

一 昨年の第二回総会の決定にもとづき、昨年からの引続き討議を積み重ねてきている課題です。チームのメンバーは、大野、田中、半田、土田、宮口、黒澤、小島、内山、大久保、萩野各氏十名に新たに松澤氏が加わり「提言」案のま

とめにとりくんできました。

今年度は昨年の総会に提起した「中間報告」とこれに対する会員等からの意見をふまえ、チームとしての討議を深めながら「提言」案の骨格となる論点を定め、「草案」をつくりました。さらに和歌山県竜神村で県下の通常会員の参加も得て、現地での調査やヒヤリングをおこない、草案内容の検討を加えました。

「提言」案について、各位から意見が寄せられています。これらについては、会誌No.16にそれぞれコメントしています。

これからの問題点も含めて、今後定点調査地等において、実践的活動を通じて内容の充実を期していくべきものと考えています。

2. 「国有林問題」課題（森林チーム）のとりくみ

昨年の第三回総会の決定にもとづき「国有林問題」について森林チームを主体にして討議を重ねてきました。メンバーは、大内、柴田、遠山、友永、本間、杉本、志村、北村、萩野の昨年に引続く各氏九名に新たに、岡、福岡の両氏が加わり、「提言」案のまめにとりくみま

した。

国有林問題に関する、諸資料、特に各界から

の見解等について資料を収集し検討を加えてきました。また、会員及び部外有識者等からのヒヤリング、「提言」案の骨格と論点などの整理、草案にもとづく討議などを積み重ねてきました。

「提言」案に対する会員等からの意見についても、可能なかぎりこれを取り入れ、追加、補強修正をおこない、幹事会、評議員会の討議を経て、本総会に「提言」案として提起することになりました。

なお、国有林における森林施業問題については、今後、現地の実態調査等をおこない問題点の指摘をしていくことも考えております。

四、山村地域の定点調査について

当会議発足と同時に設定した上野村につきましては、その後も大野幹事の精力的なとりくみが継続しておりますが、山村問題の「提言」内容とも関連して、今後、具体的な実践活動が期待されています。

また、調査地の追加については、高知県内を候補として打診しておりましたが、距離的な事情等もあり、当面これを見送らざるを得ない状況にあります。

特に今回の「提言」に対する会員の意見のなかでは、調査地の追加等が期待されていることもあり、協力団体等の要請等をふまえ今後選定、追加していきたいと考えています。

五、会誌の発行

当会議の機関誌的役割を担っている「国民と森林」誌は、これまでに十六号となり、定期的な発行と、内容充実につとめてきました。

発行部数は、いま千二百部となっております

会誌の編集内容については、幹事会、評議員会においても、意見が出ておりますが、会員からのアンケートや本総会での意見等をふまえ、総会後、幹事会でさらに会誌編集についての討議をおこない、会員参加による内容の充実をはかっていく考えています。

六、会員等の拡充について

冒頭にもふれたように、当会議の現在の通常会員の数は、現在百二十五名（昨年総会時では、百二十三名で、逝去等による退会四名、新規加入六名）、購読会員数は九十三名（昨年総会時七十八名、新規加入十五名）、賛助会員一団体となっております。（そのほか会誌の不定期読者九百人）

通常会員の拡大については、昨年の総会で確認した要領「加入させようとする候補者について、本人との面識の有無、事前了解の有無を問わず、当会議に加入させるべきだと思われた方を推せんしていただき、幹事会の承認を経て、事務局において加入勧誘をおこなう」によりすすめてきておりますが、この点の趣旨徹底が不十分な面があり、今後十全を期していく必要があります。

七、関係団体との協力・提携について

昨年の札幌における当会議主催の「国民の森林を考える北海道フェスティバル」も一つの契機となつて、森林や山村問題に関する国民的関心を高めるため、広く関係団体が連携、協力し合う方向を旨とすべきだとの声が、会員内外か

ら寄せられています。

目下、緑、森林、山村に関係する諸団体間で「連絡協議会」をつくる相談がすすめられ、近くその発足が準備されています。

当会議としても、当会議が設立された趣旨、活動方針等をふまえた活動の主体を堅持しつつ、このような動きに積極的に参加し、広く関係団体の協力、提携を強める方向で対処していくこととします。

八、当会議の活動、運営について

当会議も発足して四年を経過し、活動も定着しつつあり、また「提言」を明らかにすることによって、当会議の存在意義や考え方などについて、内外から注目される段階に至っています。当会議は、各界で活躍されている有能、多様な会員が自由な立場で結集していることの特質、独自性を十分に発揮できるよう、一層その運営に万全を期していかなくてはなりません。特に、地方、地域における会員相互の討論と活動参加を活発化して、実践的な活動に重点をおいてとりくんでいく必要があります。

▽プロジェクト合同会議

6月21日

大内・岡・松沢・柴田・北村・内山・志村・本間・田中・萩野（順不同・敬称略）
森林チーム（都市空間と森林）、山村チーム（提言の実験）など今後のすすめ方を協議。教育森林の事例収集もおこない会誌で紹介。



編集後記

▽…本号企画で龍山村の取材に行つて来ました。しっかり足許を見つめて、山林労働に打ち込んでいる若者の話を聞きながら考えたのは、「若者の心」のことです。

記事では紹介できませんでしたが、「デンマークからお客さんが来た。森林組合の現場で働いている女性がちゃんとその通訳ができる。山村には村外から知恵を入れて、林業のイメージを変えることが必要だ。汚い、雇用があいまい、労働が激しい、林業をやる人間は林業しかやれない者」というイメージを变えることが必要」と青山宏組合長はいつていました。龍山村の実態は、そのことが可能であることを示しているように思いました。

▽…しかし、その壮大な「実験」は始まったばかりです。本誌では、そうした意味から全国あちこちで試行されているいろんな試みについて今後も紹介していくつもりです。それが、地域の「国民森林会議」を活発にすることにつながるからだと思います。

▽…本会議の提言が各界で静かな波紋を広げているようです。最近も神奈川県庁、通産省、科学技術庁の若手官僚から「提言を送ってほしい」という依頼がありました。そうした芽が大きく育つことも、また本会議の存在意義なのでしょう。

森林の未来を憂えて

—— 国民森林会議設立趣意書 ——

日本の風景の象徴である松林が枯れつつあります。近年、台風や豪雪で各地の山林が大きな被害をうけました。また、森林を伐りすぎたため、水資源の不安が強まっています。

一九六〇年代の高度経済成長のもとで、人びとは農山漁村から大量に都市へ流出しました。とくに林業の分野では、戦後大規模に造林を進めたにもかかわらず、その手入れはなおざりにされています。

日本の森林は、いま病んでいます。このままではわが国の文化を育んできた森林・山村はさらに荒廃し、その未来はまことに暗いといわねばなりません。

このような現実を見ずしてよいのでしょうか。いま私たちは、次のような課題の解決を迫られていると思います。

一、二世紀初頭までには、地球上の森林の二割が失われるといわれています。人類にとって重要な機能をもつ森林に、私たちはどのように活力を与え、守り育てていくべきでしょうか。

一、森林は、林業にかかわる人びとによってこれまで辛うじて支えられてきました。このままでは、その担い手を失う日が近いのではないのでしょうか。

一、山村に住み、林業で働いている人びとと、都市に住む人たちとはどのように手をにぎり合えるでしょうか。

一、いまみられる民有林や国有林の危機的状態は、どのようにして克服することができのでしょうか。

一、いま、わが国は、木材需要の七割を外材に依存しています。森林資源の枯渇する中で、開発途上国の森林にどのようにかかわるべきでしょうか。

このような森林をめぐる諸問題の解決は、決して林業関係者だけにゆだねておくべきではありません。美しい国土と緑を子孫に残すために、日本の森林はどうあるべきか、いまこそ国民的合意を高める必要があります。

私たちは、以上のような国民的立場から、将来の森林や林業・山村のあり方を方向づけ、提言としてまとめ、その実現を期したいと思います。このためには、広い視野と長期の展望に基づいた英知の広範な結集がぜひ必要です。

そこで「国民森林会議」を設立し、広く国民・政府に訴えることを決意するに至りました。多くの方々のご賛同ご加入を望んでやまない次第です。

一九八二年一月九日

季刊 国民と森林

1986年夏季号

第17号

- 発行 1986年7月1日
- 発行責任者 隅谷三喜男
- 発行所 国民森林会議
東京都港区赤坂1-9-13
TEL 03(583) 2 3 5 7
振替口座 東京2-70096
- 定価 1,000円(千共)
(年額 3,000円)